日田市

PRINTED WITH SOY INK
Trademark of American Soybean Association

上井手遺跡４次

日田市埋蔵文化財調査報告書第113集

2018年

日田市教育委員会

日田市埋蔵文化財調査報告書第113集

上井手遺跡４次

２０１８年
日田市教育委員会

調査地全体写真（南東から）

Ａ区遺物出土状況（南東から）

序　文

この報告書は、当委員会が平成 27 年度に宅地造成工事に伴って実施した上井手遺跡４次の発掘調査内容をまとめたものです。

調査では、これまで日田市内で行われてきた遺跡の発掘では最多となる縄文土器や石器が出土し、調査地の近辺に大規模な集落が存在する可能性をうかがうことができました。

こうした発掘調査の成果をまとめた本書が、今後、文化財の保護や普及啓発、地元の歴史を知る手掛かりとして、また学術研究等にご活用いただければ幸いです。

最後に、調査に対するご理解やさまざまなご協力を賜りました関係者のみなさまに、また、作業にご尽力いただきました作業員のみなさまに、心より厚くお礼を申し上げます。

平成３０年３月

日田市教育委員会

教育長　三 笘　眞 治 郎

例　言

1．本書は、宅地造成工事に先立ち、平成 27 年度に市教育委員会が実施した上井手遺跡４次の発掘調査報告書である。

2．調査は宅地造成工事に伴い、有限会社宝珠開発の委託業務として日田市が受託し、 日田市教育委員会が事業主体となり実施した。

3．調査にあたっては、事業者である有限会社宝珠開発、施工業者である有限会社松岡ガーデンにさまざまなご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。

4．発掘調査では、 平面遺構実測の一部を株式会社埋蔵文化財サポートシステム大分支店に委託して実施し、本書ではその成果品を使用した。

5．本書に掲載した空中写真は、九州航空株式会社に委託して撮影を実施し、その成果品を使用した。

6．調査現場での遺構実測の一部は財津真弓･森山敬一郎（発掘作業員）が行い､写真撮影は調査担当者が行った。

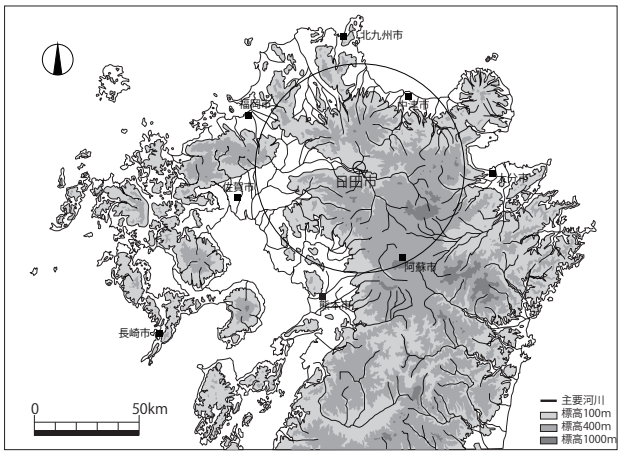
7．本書に掲載した遺物実測図は、有限会社九州文化財リサーチに委託した成果品及び担当者が行ったものを使用した。また、遺構図及び遺物実測図の製図及び遺物写真撮影は担当者のほか、用松操（整理作業員）の協力を得た。

8．挿図中の方位は第３図は真北、それ以外は磁北を示し、国土座標は世界測地系に基づいている。

9．写真図版の遺物に付した数字番号は、挿図番号に対応する。

10. 出土遺物および図面写真類は、日田市埋蔵文化財センターにて保管している。

11. 本書の執筆・編集は、若杉が担当した。



日田市の位置

大分県の行政地区

本文目次

Ⅰ　調査の経過 …… 1
（１）調査に至る経緯 …… 1
（２）発掘作業の経過 …… 2
（３）整理等作業の経過 …… 2
Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 3
Ⅲ　調査の内容 …… 4
（１）調査の概要 …… 4
（２）遺構と遺物 …… 4
Ⅳ　総括 …… 19

挿図目次

第１図　調査区位置図（1/5,000）…… 1
第２図　調査区周辺地形図（1/600）…… 2
第３図　周辺遺跡分布図（1/25,000）…… 3
第４図　調査区全体図（1/300）…… 4
第５図　Ａ区遺物出土状況及び土層実測図（1/50）…… 5
第６図　Ｂ区遺物出土状況及び土層実測図（1/50）…… 6
第７図　Ｃ区遺物出土状況及び土層実測図（1/50）…… 7
第８図　Ｄ区遺物出土状況及び土層実測図（1/50）…… 8
第９図　Ｅ区遺物出土状況及び土層実測図（1/50）…… 9
第10図　Ｆ区遺物出土状況及び土層実測図（1/50）…… 10
第11図　出土遺物実測図（1）（1/6）…… 12
第12図　出土遺物実測図（2）（1/6）…… 13
第13図　出土遺物実測図（3）（1/6）…… 14
第14図　出土遺物実測図（4）（1/6）…… 15
第15図　出土遺物実測図（5）（1/6）…… 16
第16図　出土遺物実測図（6）（1/2・1/3・1/4）…… 17
第17図　出土遺物実測図（7）（1/2・1/3）…… 18

写真図版目次

巻頭写真図版上　調査地全体写真（南東から）
下　Ａ区遺物出土状況（南東から）
写真図版１上　調査地周辺空中写真（西から）
下　調査区垂直写真（上が東）
写真図版２　①Ａ区遺物出土状況１（南西から）
②Ａ区遺物出土状況２（北西から）
③Ａ区遺物出土状況３
④Ａ区遺物出土状況４
⑤Ａ区遺物出土状況５
⑥Ａ区西壁土層堆積状況
⑦Ａ区西壁土層堆積状況
⑧Ａ区北壁土層堆積状況
写真図版３　①Ｂ区遺物出土状況１（南西から）
②Ｂ区遺物出土状況２（南西から）
③Ｂ区遺物出土状況３
④Ｂ区遺物出土状況及び北壁土層堆積状況
⑤Ｂ区西壁土層堆積状況
⑥Ｃ区遺物出土状況１（北東から）
⑦Ｃ区遺物出土状況２
⑧Ｃ区北壁土層堆積状況
写真図版４　①Ｃ区西壁土層堆積状況１
②Ｃ区西壁土層堆積状況２
③Ｄ区遺物出土状況（北東から）
④Ｄ区西壁土層堆積状況
⑤Ｄ区北壁（東側）土層堆積状況
⑥Ｅ区遺物出土状況１（南東から）
⑦Ｅ区遺物出土状況２
⑧Ｆ区遺物出土状況及び西壁土層堆積状況
写真図版５～７　出土遺物

本文写真目次

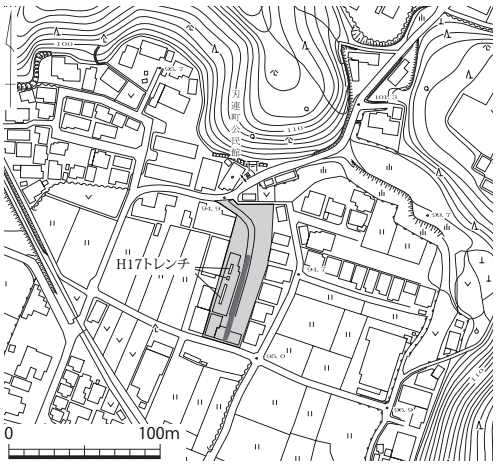
写真１　機械作業風景 …… 2
写真２　発掘作業風景 …… 2

表目次

第１表　出土遺物観察表（1）…… 20
第２表　出土遺物観察表（2）…… 21
第３表　出土遺物観察表（3）…… 22
第４表　出土遺物観察表（4）…… 23

Ⅰ　調査の経過

（1）調査に至る経緯



第１図　調査区位置図（1/5,000）

平成 27 年 3 月 23 日付けで有限会社宝珠開発より、大字日高字取所 816-1 ほかでの宅地造成に伴う埋蔵文化財の所在の有無についての照会文書（事前審査番号 2014092）が提出された。この開発予定地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である上井手遺跡に該当し、平成 17 年には同じ場所で宅地造成に伴って、位置指定道路部分を対象に予備調査を実施し、多くの縄文土器や土偶などが出土していたことから、遺跡の存在は明らかになっていた（渡邉 2017・19 P参考文献参照）。今回、照会を受けた事業では位置指定道路部分（延長約 100 m、幅 4.5 m）が平成 17 年度時点の計画に対して東側に約 10 mずれていたことから、その範囲で遺跡の内容を確認することが必要と判断し、予備調査の実施等、その取扱いについて協議が必要な旨の文書回答を行った。

その後、予備調査の依頼文書が平成 27 年 4 月 10 日に提出され、同年 4 月 24 日に、位置指定道路を対象に予備調査を実施した。その結果、対象地のうち、北側では遺構・遺物は確認されなかったが、南側において地表面より約 80 ～ 90㎝下位より、暗褐色の粘質土を確認し、その層中より多くの縄文土器・石器が出土したことから遺跡の存在が明らかとなった。この結果により、道路南端から約 80 m北までの間、遺跡が存在すると想定した。

この事業予定地の造成は宅地部分は全面盛土工法であるものの、位置指定道路については下水道管の埋設に伴い掘削され、遺跡の保存が困難となる可能性があったため、発掘調査の実施に向けて、事業者と経費や期間について協議を行った。当初の計画における下水道管の埋設深度では、発掘の作業量が多くなり、それに伴い経費が多額になることは明らかであった。そこで下水道管の深度を浅くするように工法変更し、経費を抑えるとともに調査期間の短縮を図ることで事業者と協議を重ねた。その結果、下水管の埋設深度を当初予定より約 20㎝浅くする工法変更を行ったことにより、遺跡の想定範囲の内、約 68 m分を対象として、発掘調査を実施することとなった。

その後、平成 27 年 8 月 14 日に発掘調査実施の依頼を受け、同月 17 日付けで平成 27 年度から平成 29 年度まで 3 か年にわたる発掘調査から報告書印刷までの協定書、平成 27 年度（契約期間平成 27 年 8 月 20 日～平成 28 年 3 月 31 日）の発掘調査に係る委託契約を取り交わした。また、後述するように、出土した遺物が大量であったため、平成 28 年度の整理作業に係る経費ついて、増額とする協定変更を行った。

なお、調査に関する組織については、次のとおりである。

平成 27 年度（発掘調査）平成 28 年度（整理等作業）平成 29 年度（報告書作成、印刷）

調 査 主 体　日田市教育委員会

調査責任者　三笘眞治郎（日田市教育委員会教育長）

調 査 統 括　柴尾健二（日田市教育庁文化財保護課課長／平成 27 年度）

池田寿生（同課長／平成 28 年度）　梶原康弘（同課長／平成 29 年度）

調 査 事 務　園田恭一郎（日田市教育庁文化財保護課主幹（総括）／～平成 27 年 9 月）

古賀信一（同主幹（総括／平成 27 年 10 月～））

行時桂子　渡邉隆行（同課主査）長祐一郎（同課主査／平成 28 年度～）

上原翔平（同課主任）諫山温子（同課主任／平成 27 年度）

調査・報告書担当　若杉竜太（日田市教育庁文化財保護課主査）

発掘作業員　秋吉新六　小野昭信
小野ミユキ　河津モリ
北澤幾子　財津真弓
佐藤継信　佐藤洋子
宮木博幸　森山敬一郎
和田征二

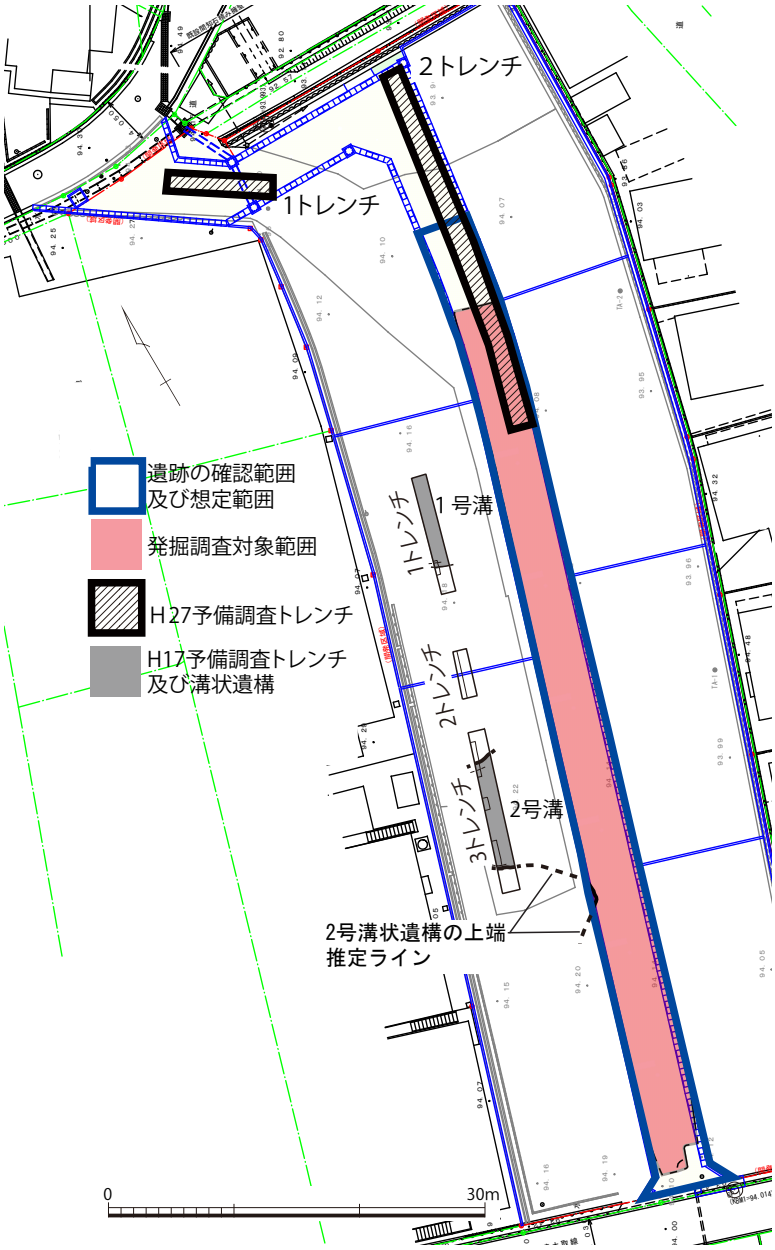
整理作業員　伊藤一美　高瀬真奈美
武石和美　立川幸子
用松操　吉田里美

（2）発掘作業の経過

現場での発掘作業の経過は次のとおりである。

8 月 31 日　アスファルト剥がし開始
9 月　2 日　重機による表土剥ぎ開始
9 月　3 日　作業員による遺構検出開始
9 月　7 日　掘下げ開始
10 月　9 日　実測開始
10 月 16 日　空中写真撮影実施
10 月 19 日　掘下げ及び実測終了
機材整理
10 月 20 日　機材撤収、調査終了

なお、調査区の南側では、湧水が激しかったことから、事業者の協力の下、電気設備を設置し、常時水中ポンプによる水抜きを行った。



第 2 図　調査地周辺地形図（1/600）

（3）整理等作業の経過

出土遺物の整理作業は平成 28 年 6 月 10 日から平成 29 年 2 月 16 日まで行った。それとともに、平成 29 年 2 月 10 日～ 3 月 9 日まで遺物実測の委託業務を実施、平成 29 年 4 月より平成 30 年 1 月まで担当者及び整理作業員による遺物実測・製図・写真撮影および遺構製図作業、報告書執筆・編集作業を実施し、印刷を行った。

出土遺物については、全ての水洗・注記を行ったが、遺物量が膨大なため、接合及び補強は最低限にとどめている。合わせて諸事情により、報告に必要と判断される遺物については、すべての実測及び掲載はしていない。また、時間的な制約から土器の実測図の調整表記は一部としており、残りは観察表に記載している。このほか、石器については、基本

写真 1　機械作業風景

写真 2　発掘作業風景

Ⅱ　遺跡の位置と環境

上井手遺跡は市盆地東部、三隈川右岸の沖積地一帯に広がる遺跡で、三芳地区に該当する。この三芳地区は三隈川右岸の沖積地とその東側の元宮原台地、さらに東側の求来里川流域一帯に広がる地区である。三芳地区を中心に、上井手遺跡周辺の遺跡を概観する。

まず、三芳地区の北西側に田島地区との境をなすように会所山丘陵が東西に延びているが、この丘陵上には、古墳時代後期の円墳である鳥羽塚古墳 (5) や横穴式石室を主体とする北向古墳 (6) などが存在する。

この会所山丘陵の南東側にある独立丘陵上には 1 基の装飾古墳を含み 7 基の円墳からなる法恩寺山古墳群 (2) が存在し、古代日田を治めた日下部氏の祖先の奥津城と推定されている。

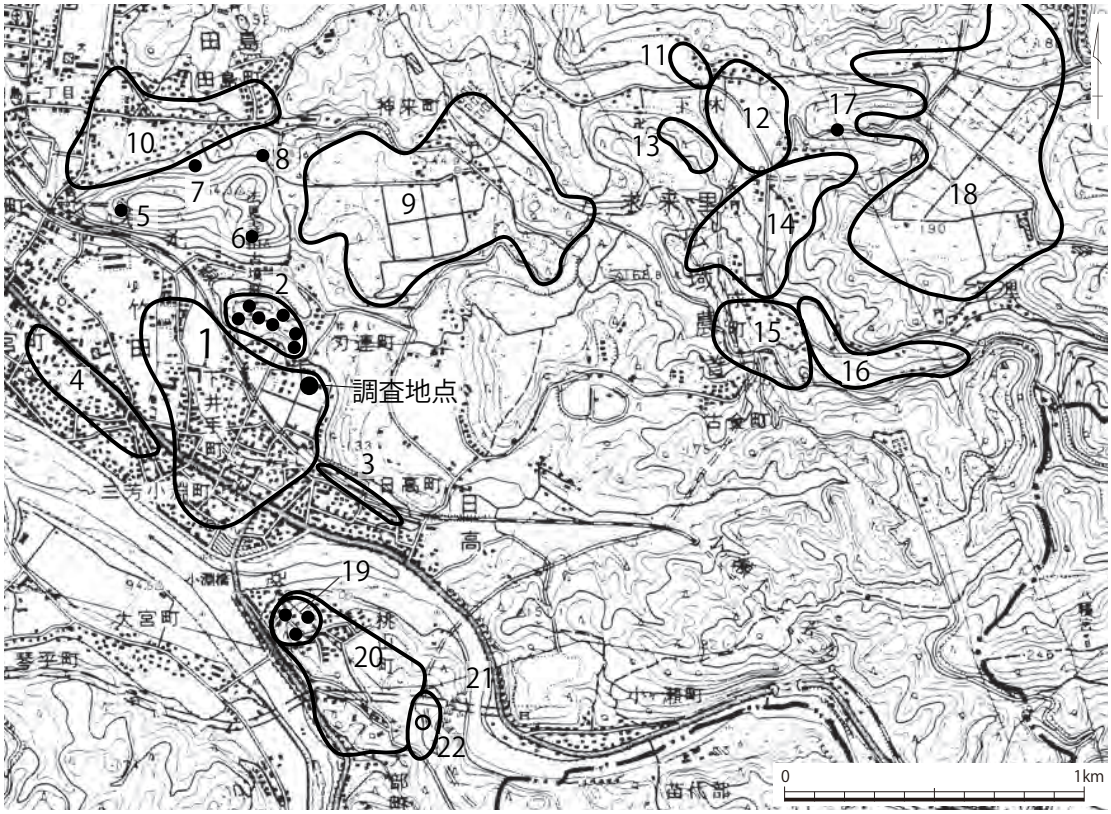
上井手遺跡の南東側には東寺横穴墓群 (3) 存在し、この付近にはＪＲ久大線建設時に破壊されたとされるダンワラ古墳がある。

三隈川と大山川の合流地点の南東側に張り出した丘陵上にも遺跡が展開する。古墳時代前期の方形周溝墓や中世の塚が確認された牧原遺跡 (21・22) や、円墳とみられる千人塚古墳群 (19) などがある。また、千人塚古墳群を含む一帯は縄文時代の炉穴や集石、奈良時代の焼土坑などが確認された大部遺跡 (20) に含まれる。

上井手遺跡北側の台地には、弥生時代から古墳時代の墓地や中世の塚が確認された元宮遺跡 (9) が広がる。元宮遺跡の東側から南東側にかけて求来里川によって形成された谷筋には、縄文時代から近世に至るまでの集落や墓地が見つかった小西遺跡 (11)・町ノ坪遺跡 (12)・金田遺跡 (13)・求来里平島遺跡 (14)・名里遺跡 (16) などが点在している。

上井手遺跡の西側の沖積微高地には、柳ノ本遺跡 (4) が所在し、近年の調査で弥生時代から古墳時代に至る集落や墓地が確認されている。

（註）　各遺跡の詳細については、調査報告書等を参照されたい。



1　上井手遺跡
2　法恩寺山古墳群
3　東寺横穴墓群
4　柳ノ本遺跡
5　鳥羽塚古墳
6　北向古墳
7　後山古墳
8　田島古墳
9　元宮遺跡
10 会所宮遺跡
11 小西遺跡
12 町ノ坪遺跡
13 金田遺跡
14 求来里平島遺跡
15 着来遺跡
16 名里遺跡
17 亀ノ甲古墳
18 町野原遺跡
19 千人塚古墳群
20 大部遺跡
21 牧原千人塚
22 牧原遺跡

第３図　周辺遺跡分布図（1/25,000）

Ⅲ　調査の内容

（1）調査の概要

調査地は、法恩寺山古墳群が存在する独立丘陵の南東側、標高 93 ～ 94 m の沖積面に位置する。調査の経過でも触れたが、調査は事業予定地内の幅 4.5 mの位置指定道路約 68 m、272㎡を対象として実施した。工事の掘削深度が南側は深く、北側が浅かったため、調査時に掘り下げる深さもそれに合わせることとし、調査区内の南側から 10 mをＡ～Ｇ区に分け、Ａ区からＧ区の各区毎で約 10㎝ずつ浅くなっている。掘り下げた深さはＡ区が現地表面から約 1.4 m、Ｇ区が約 0.8m である。また、区名は遺物の取り上げに利用している。

調査は重機で遺物検出面上面まで掘り下げ、その後人力による遺構検出・掘り下げ作業を行った。その結果、多くの遺物が出土するとともにＡ区南東隅とＣ区西壁際において、溝状遺構の一部を確認することができた。なお、調査の方法としては、遺物包含層の調査と同様の方法で掘り下げを行った。また、遺物の取り上げ時には、大型の遺物を中心として図化したが、その他の遺物については図化は行わず、区名と 10 ～ 15㎝の幅で出土したレベルを記録した。

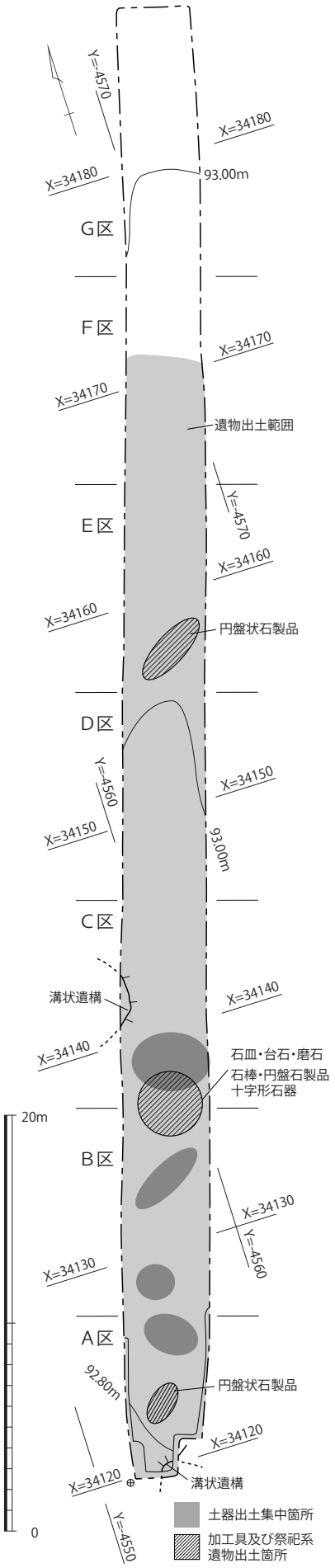
（2）　遺構と遺物

今回の調査では、溝状遺構の一部を確認できたのみであったが、後述するように遺物の出土状況から建物等、何らかの施設が存在したことも否定することができない。よってここでは、土層の堆積状況、遺物の出土状況及び出土遺物の分類等について述べていきたい。

1．土層堆積状況（第 5 ～ 10 図　図版 2 ～ 4）

まず、土層の堆積状況については、調査区（Ａ～Ｆ区）の西壁及びＡ～Ｄ区の北壁について、第 5 ～ 10 図に示した。各層の色調、土質等については、次のとおりである。このうち、堆積する 5（a ～ d)・6 層が遺物を含む層である。また、5e 層が溝状遺構の掘り込み面と考えられ、6 層は溝状遺構の埋土でもある。その下位の 7 層以下からは遺物は出土していない。

1 a 層　灰褐色粘質土層　現代の造成土
1 b 層　灰橙褐色粘質土層　撹乱層
2 層　灰褐色粘質土層　しまりなし、造成時の盛土
3 層　灰茶褐色粘質土層　水田層
4 層　水田基盤土
5 a 層　灰橙色砂質土層　粒子細かい
5 b 層　明褐色砂質土層　しまりあり、粒子粗い、溝状遺構埋土
5 c 層　灰茶褐色砂質土層　しまりあり、粒子粗い
5 d 層　灰橙色砂質土層　粒子細かい
5 e 層　暗灰色砂質土層　しまりなし、溝状遺構の掘り込み面

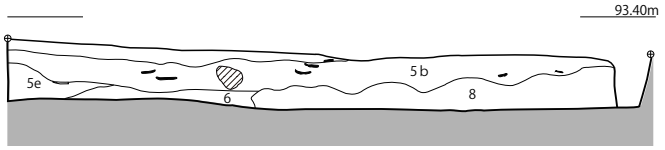


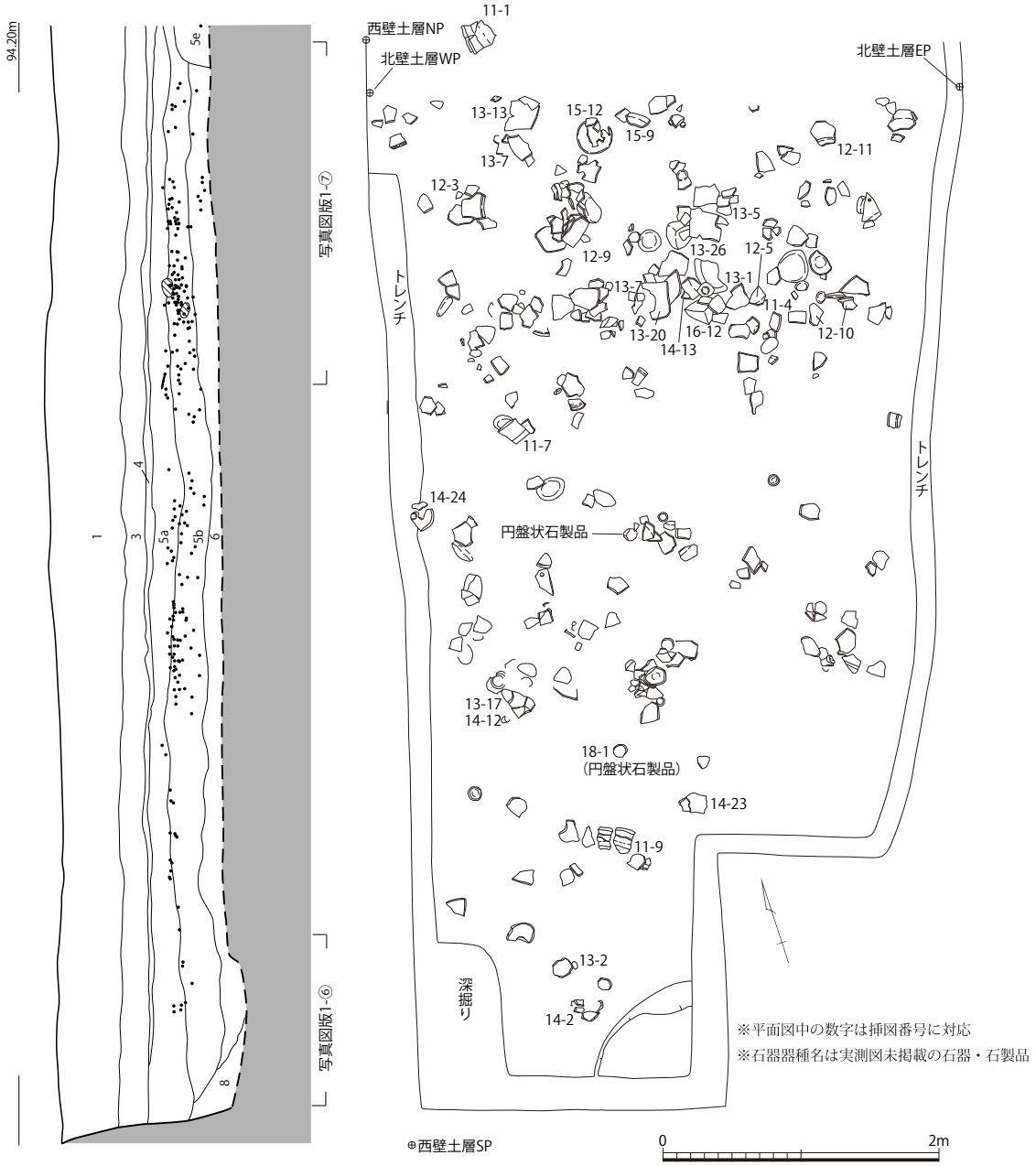
第 4 図　調査区全体図（1/300）

６層　　灰褐色砂質土層　しまりあり、粒子細かい、溝状遺構埋土
７層　　暗灰黄色砂質土層　固くしまる、粒子細かい
８層　　黄褐色粘質土層　遺構検出面（Ｃ区の落ち込み）
９層　　灰黒色砂質土層　今回確認した最下層

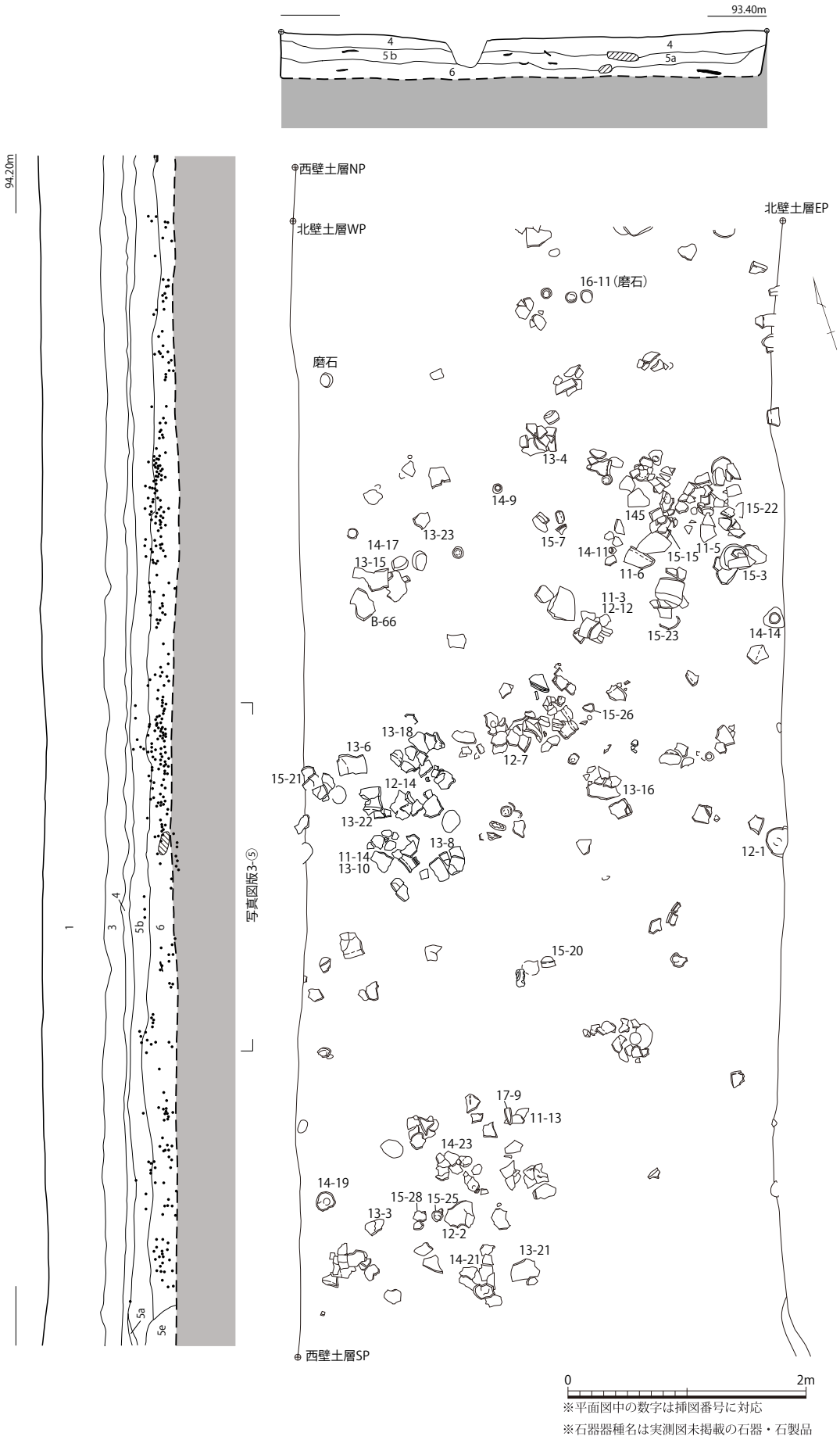
２．遺物出土状況（第５～10図　図版２～４）

ここでは、遺物の出土状況について述べる、全体的には調査区南側のＡ区からＣ区が多く、Ｄ区、Ｅ区と北へ向かうにつれて、少なくなり、Ｇ区では出土しなかった。掘り下げた深さが南側の方が深いことを踏まえても、概ね南側に遺物が多いという傾向はある。また遺物の多いＡ区からＣ区では、土器は大型の破片が多く、打製石斧などの石器とともに折り重なるような状





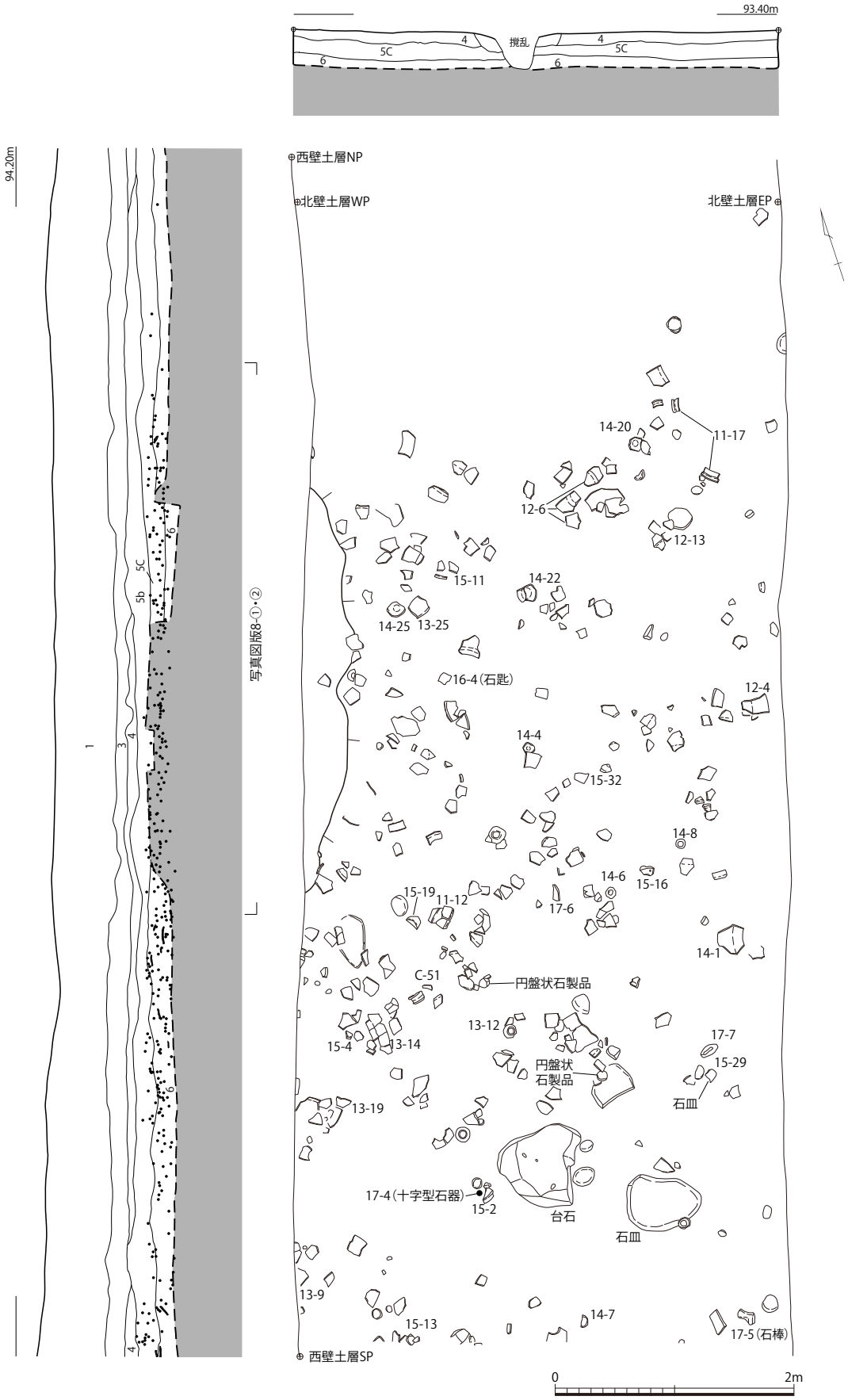
第５図　Ａ区遺物出土状況及び土層実測図（1/50）



※平面図中の数字は挿図番号に対応

※石器器種名は実測図未掲載の石器・石製品

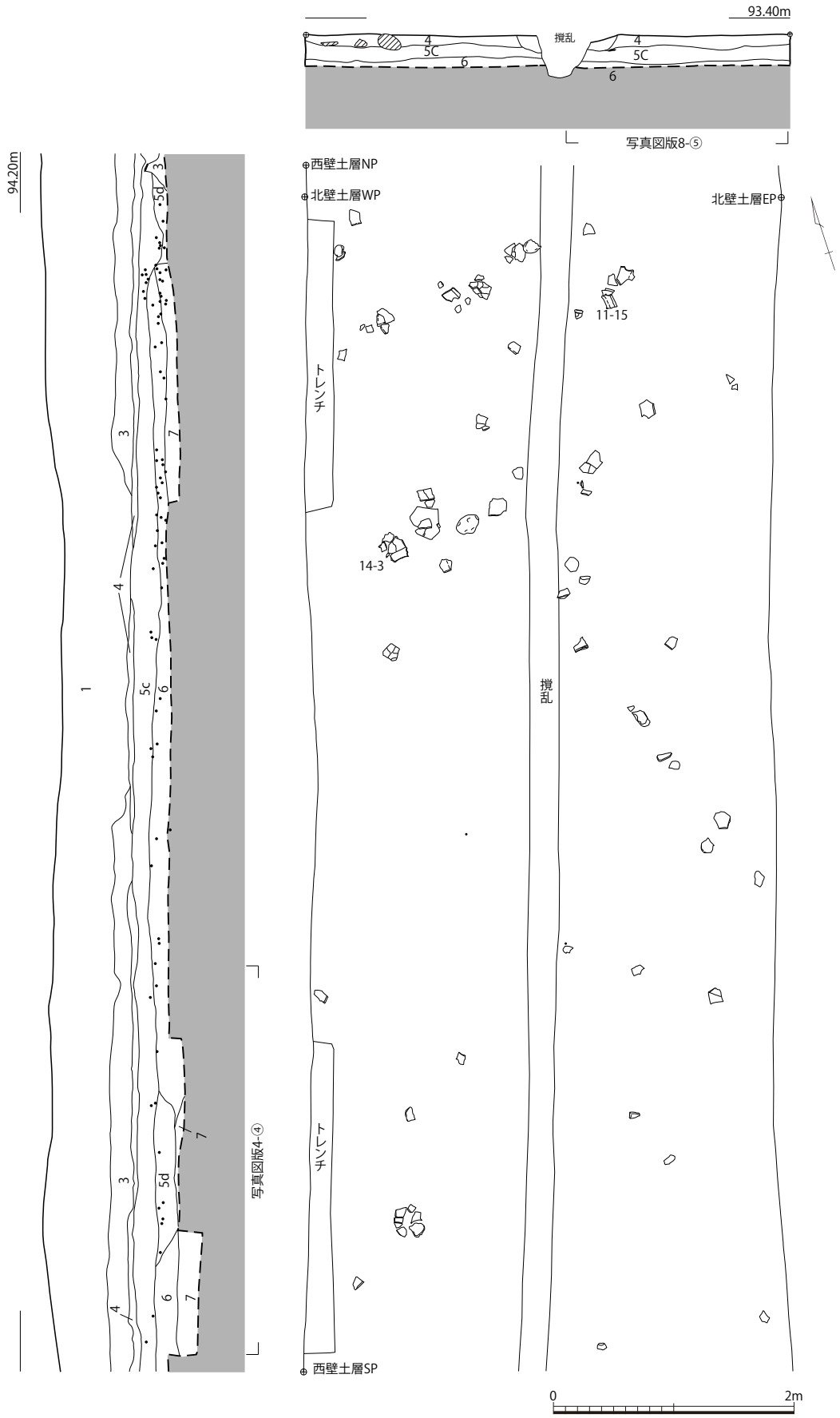
第６図　Ｂ区遺物出土状況及び土層実測図（1/50）



※平面図中の数字は挿図番号に対応

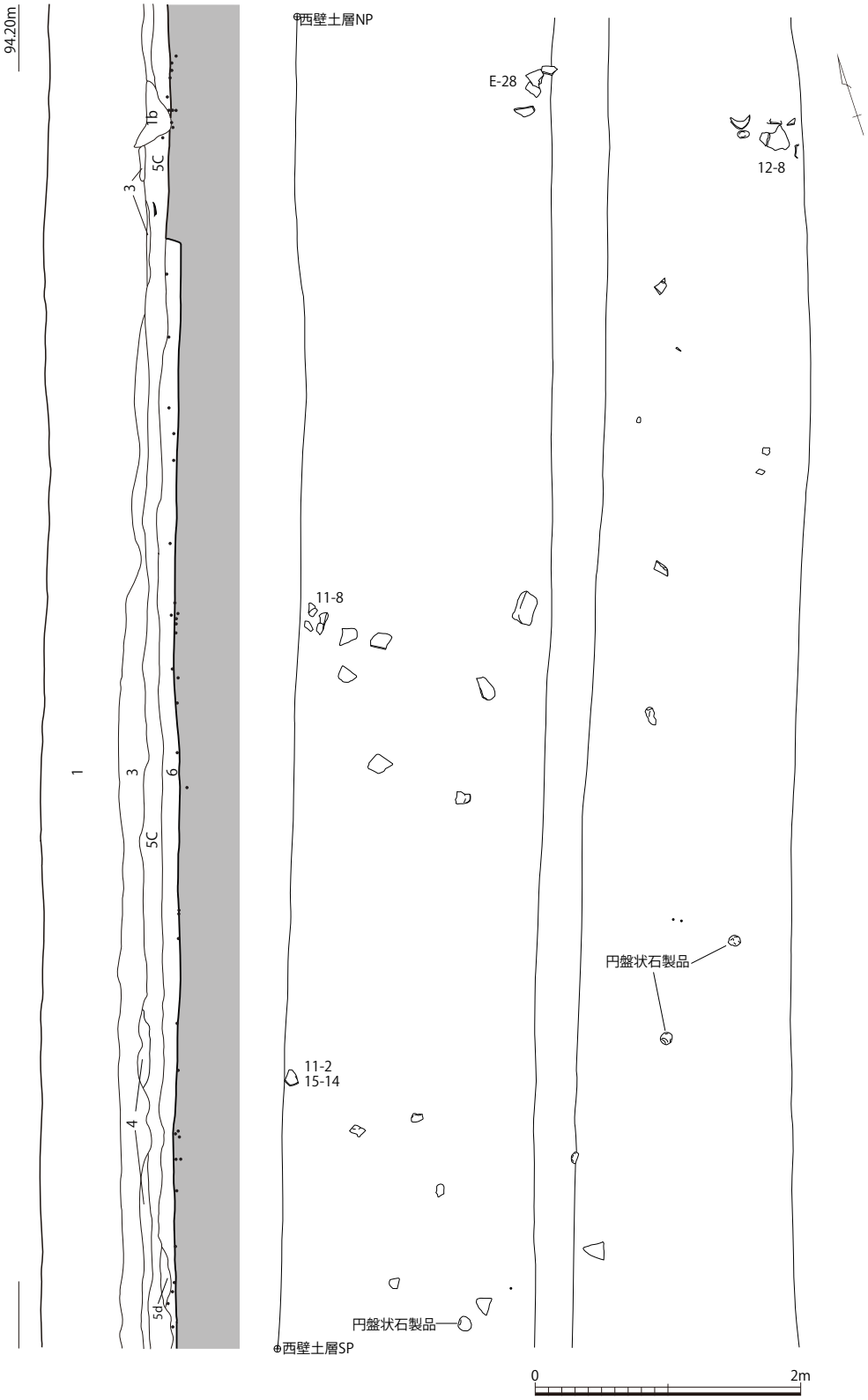
※石器器種名は実測図未掲載の石器・石製品

第７図　Ｃ区遺物出土状況及び土層実測図（1/50）



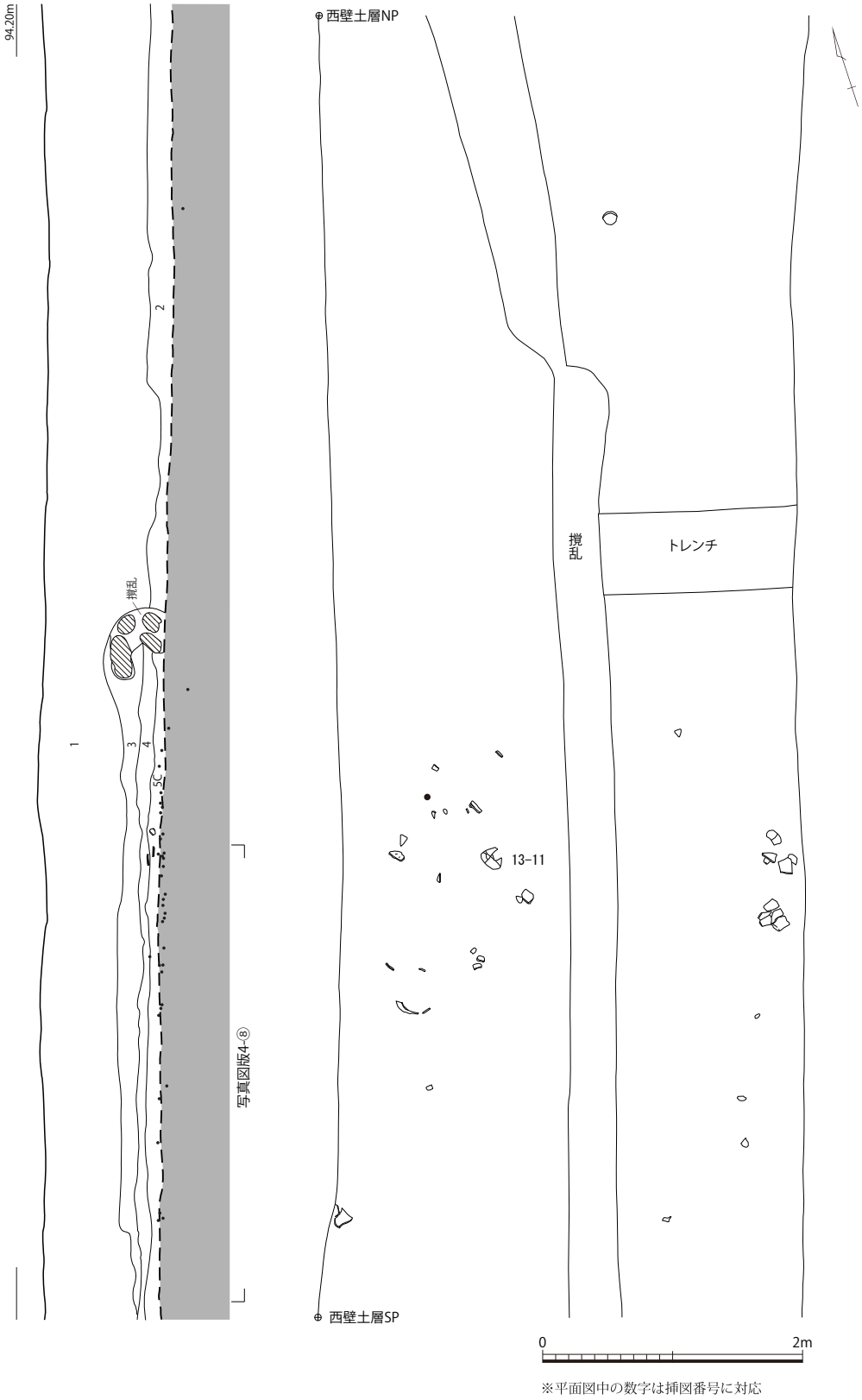
※平面図中の数字は挿図番号に対応

第 8 図　D 区遺物出土状況及び土層実測図（1/50）



※平面図中の数字は挿図番号に対応
※石器器種名は実測図未掲載の石器・石製品

第 9 図　E 区遺物出土状況及び土層実測図（1/50）



第 10 図　F 区遺物出土状況及び土層実測図（1/50）

態で出土している状況から、大量の土器が繰り返し、廃棄されたものと考えられる。

以下、各区毎の遺物出土状況について述べる。

Ａ区では南端で溝状遺構の上端とみられる高まりが確認され、これの埋土と考えられる５ｂ層・６層から集中して遺物が出土した。平面的に見ると、遺物は北側に集中して出土しており、円盤状石製品が中央付近及び南側で見つかっている。

Ｂ区では５e 層を境にして、ほとんどの遺物が６層から出土し、Ａ区の出土層位と異なっている。遺物は南側及び中央付近で集中して出土し、その場所は大きく２か所に分けられる。また、Ｂ区北側からＣ区南側にかけては、台石・石皿・磨石などの加工具が近い位置でまとまって出土している。

Ｃ区での土器の出土状況は溝状遺構の落ち込みにあたる部分までは多くが出土しているが、それより北側になると一気に出土量が減少する。出土した層位についてみると、溝状遺構の落ち込み部分を挟んで、南側では６層、北側では６層に加え、５ｃ層から多くが出土している。また、祭祀系の遺物についても十字形石器や石棒がＣ区南側で出土している。

Ｄ区では北側で大型の破片が数点（第 11 図 15・第 14 図 3）出土しているものの、出土量は少ない。遺物が出土した層位は５ｃ層や５ｄ層で若干みられるものの、６層が中心である。

Ｅ区では北側で数点の大型の破片が出土している一方、南側で円盤状石製品が近い位置で出土していることが特徴として指摘できる。また、遺物は全て６層から出土している。

遺物の少ない状況はＦ区でも同様で、Ｆ区の中央付近を境に北側からは遺物は出土していない。遺物は５ｃ層から出土している。

３．出土遺物（第 11 ～ 17 図　図版５～７）

出土した遺物は、縄文土器後期の深鉢形土器が最も多く、次いで浅鉢形土器、そのほか高坏形土器や注口土器なども出土している。遺物総点数は、破片数であるが、約 10,200 点である。

今回の報告で記述する土器の形式分類及び型式分類については、熊本県・ワクド石遺跡の発掘調査報告書に掲載されている分類を参考にし（古森 1994・19 Ｐ参考文献参照）、深鉢形・浅鉢形・椀形・高坏形・注口形について記述する。

①深鉢形土器

１～３類に分類でき、それぞれワクド石遺跡報告書の分類における、Ａ３類、Ａ４類、Ｂ１類にあたる。

【１類】土器が基本的に口縁部、頸部、胴部、底部の４つの部分からなっているもので、頸部の先端を口縁部とし、水平になっているもの（第 11 図 16・17）。

【２類】土器が基本的に口縁部、頸部、胴部、底部の４つの部分からなっているもので、口縁端部が水平になり、口縁部の幅が広くなるもの。頸部と口縁部の屈折の仕方で二つに細分できる。頸部上端が外反し、口縁部が内傾または直立するものや頸部から単に折れ曲がるだけで、口縁部も真っ直ぐ外傾しているものがある（第 11 図 1 ～ 15）。

【３類】 土器が基本的に頸部、胴部、底部の３つの部分からなっているもので、頸端部がそのまま口縁端部として機能しているもので、水平な口縁端部のもの（第 12・13 図）。

②浅鉢形土器

１～５類に分類でき、それぞれワクド石遺跡報告書の分類における、Ｂ１類、Ｂ２類、Ｃ類、Ｄ類、Ｅ２類にあたる。

【１類】土器が基本的に口縁部と胴部と底部からなるもので、口縁部が外湾ぎみに直立するか、内側に傾いてい

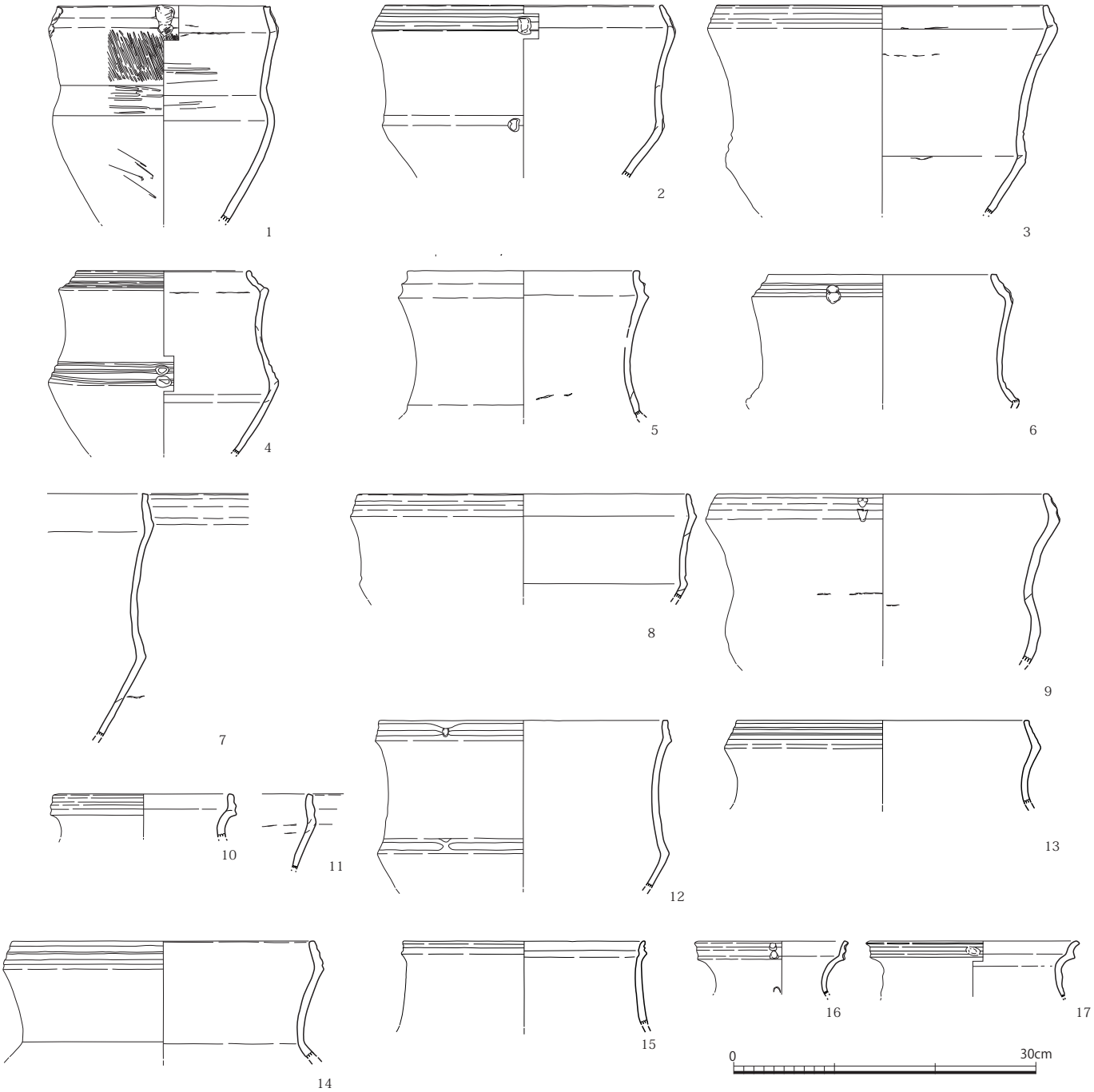
るもの（第 15 図 5・6・23）。

【２類】土器が基本的に口縁部と胴部と底部からなるもので、口縁部が内湾して直立するか外反しているもの（第 15 図 7・9・12・15・16）。

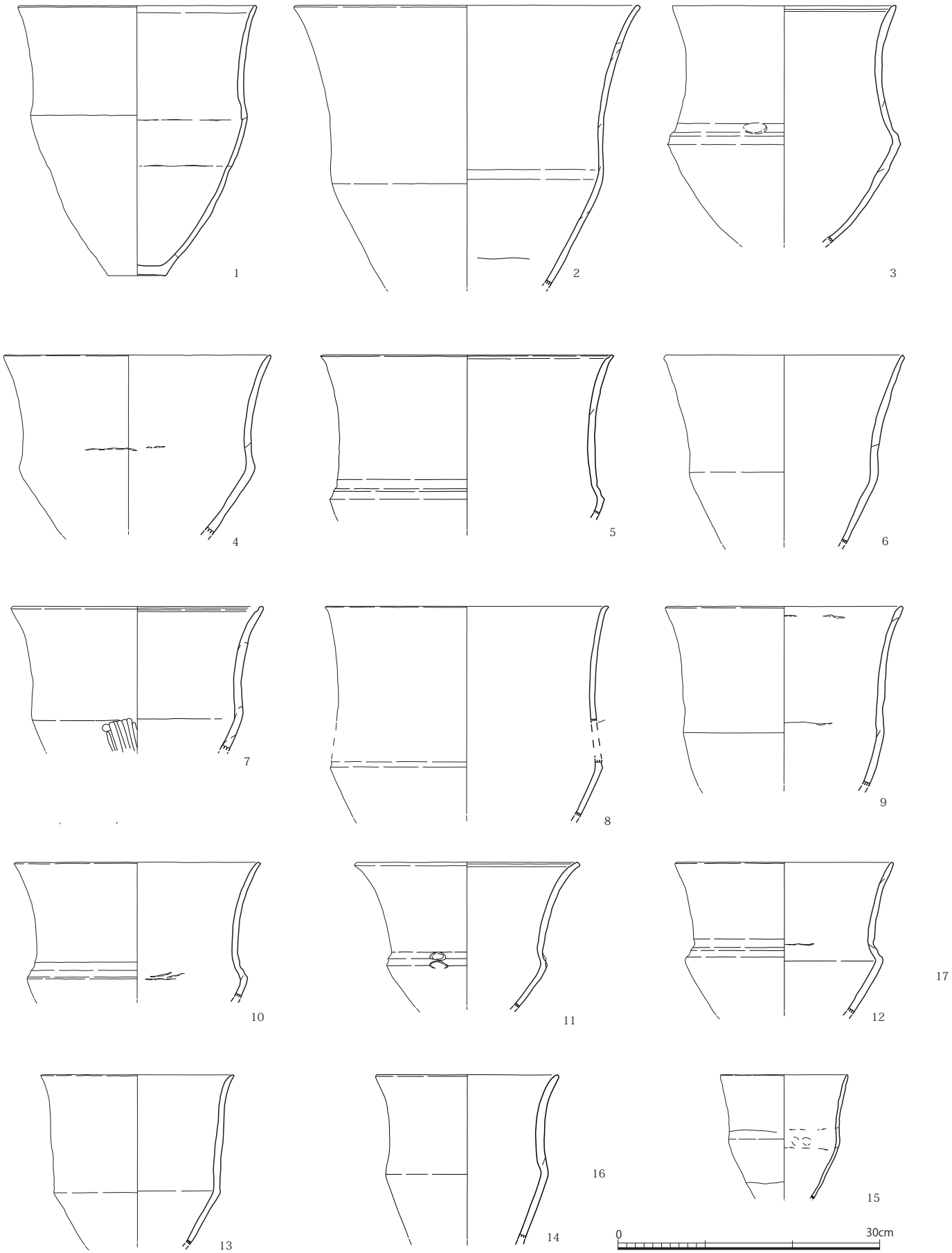
【３類】土器が基本的に頸部、胴部、底部から３つの部分からなっているもの。口縁部はなく、底部はいわゆる丸底で底部と胴部の境が明瞭でないもの（第 15 図 3・22・27）。

【４類】土器が基本的に口縁部、頸部、胴部、底部の４つの部分からなっているもの。２類の胴部をさらに頸部と胴部に分けたような器形になっており、内湾しながら外反する頸部と口縁部が連続する特徴的な形をしている（第 15 図 1・2・13・24）。

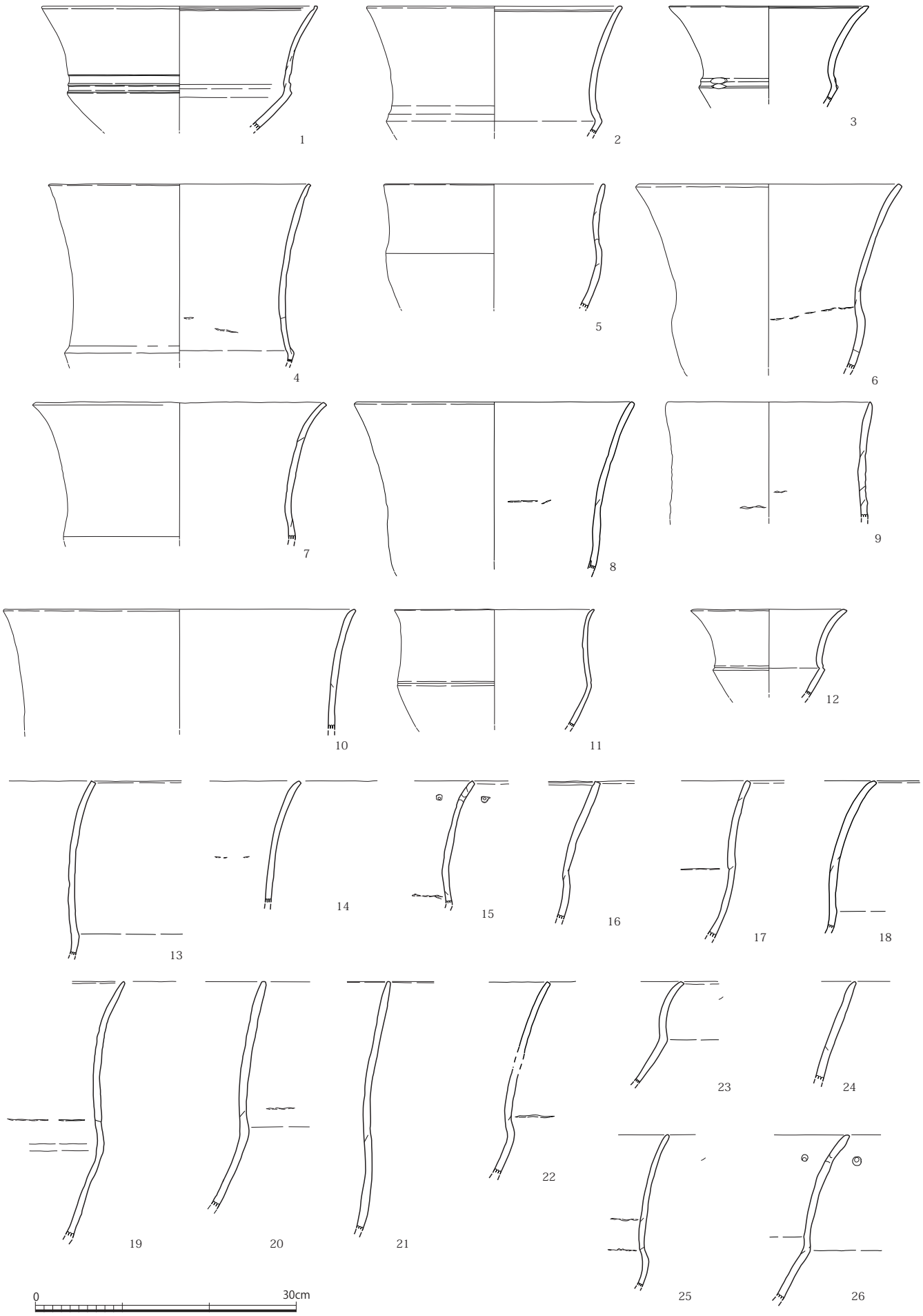
【５類】 基本的にはＤ類と４つの部分は変わらないが、底部と胴部の境は明瞭でなく、いわゆる丸底の形状をしている。４類の口縁端部に４つの小さな山形突起を付けたもの。口縁部幅の器高に対する割合は小さい（第 15 図 8・10・14）。



第 11 図　出土遺物実測図（1）（1/6）



第 12 図　出土遺物実測図（2）（1/6）



第 13 図　出土遺物実測図（3）（1/6）

③椀形土器

１・２類に分類でき、それぞれワクド石遺跡報告書のＡ類とＢ類に当たる。基本的には胴部と底部からなっており、胴端部がそのまま口縁端部になっている。

【１類】 底部と胴部の境が明瞭なものと明瞭でないものがある。境が明瞭なものは胴部が直立している（第 15 図 28）。

【２類】 楕円形に板状の粘土を底部としており、その内側から胴部が立ち上がっており、底部が胴部より外にはみ出す形をしている（第 15 図 29）。

④高坏形土器（第 15 図 30）

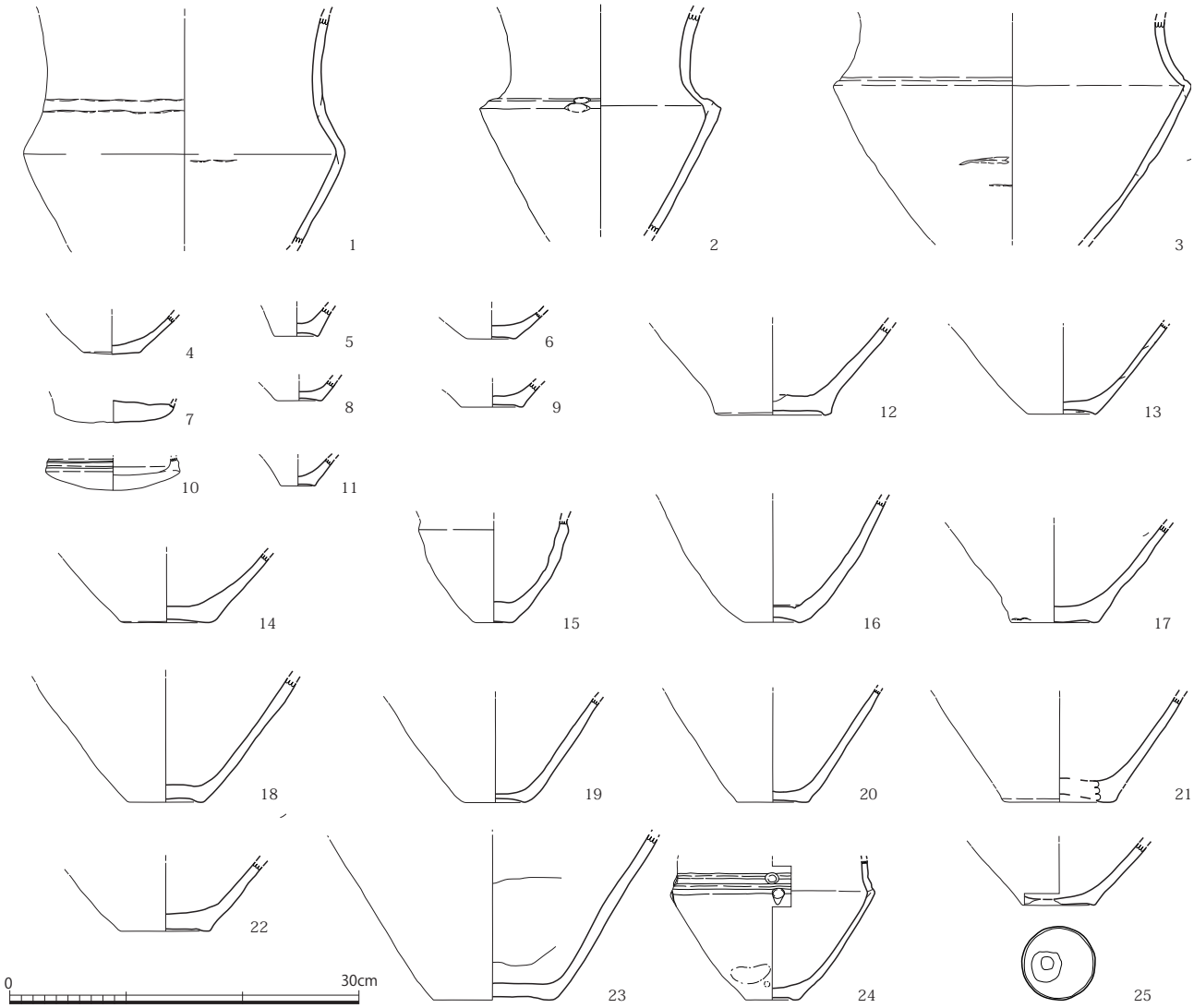
今回出土した土器は、脚部のみであり、分類は難しい。

⑤注口土器（第 15 図 31）

注口部が１点のみの出土で、比較対象がないため、分類はできない。

以上の分類を基に、今回出土した土器形式の特徴についてまとめ、、合わせて土器型式についても検討する。土器型式については島津氏・古森氏・水ノ江氏などの論考・報告を参考にした（19 Ｐ・参考文献参照）。

今回出土した土器は約 10,200 点であるが、このうち、深鉢形土器が約８割を占める。そして浅鉢型土器は２割弱、その他の土器が数パーセントの出土量となっている。

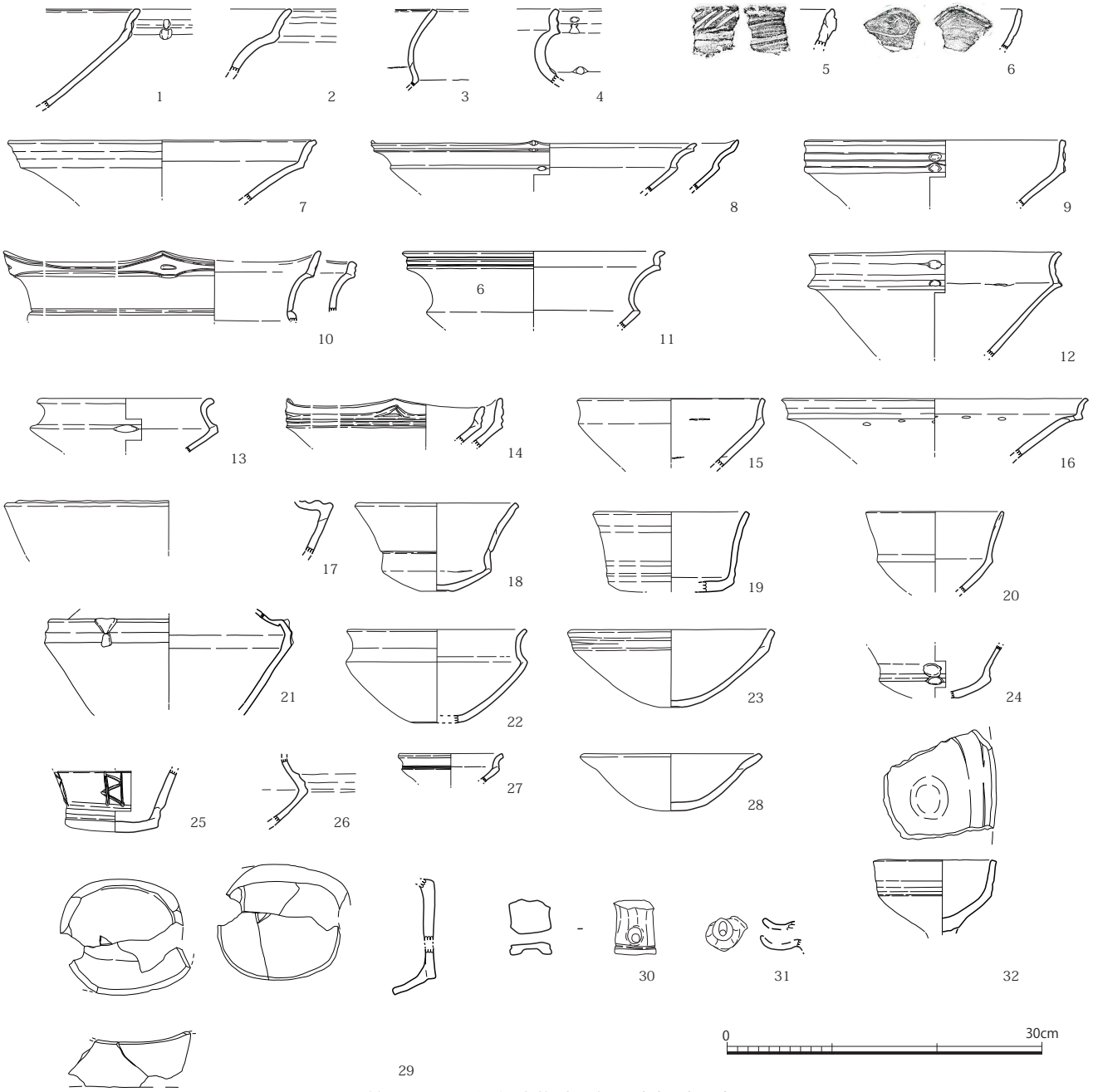


第 14 図　出土遺物実測図（4）（1/6）

深鉢形土器の傾向では、２類及び４類が大多数を占める。これ以外では１類、３類が少量ながら出土している。また、器面調整を見ると二枚貝による貝殻条痕調整後に研磨やナデを施しているものが全体の 90％と大多数を占めるが、研磨を施してしていないものも少なからず存在する（第 13 図 10）。

型式についてみると、２類では、鳥居原式の特徴である口縁部に施された凹点文がみられるものがある。（第 11 図１・２・６・12・16）。また、２類の全てが端部を内傾させるものであり、鳥居原式から御領式のものと考えられる。３類では、凹点文が施されたものや（第 12 図 3･11、第 13 図 3）、胴部がやや丸みを帯びるもの（第 13 図 6）などが鳥居原式のほかは、御領式に含まれよう。さらに１類は鳥居原式から御領式の範疇に収まるであろう。

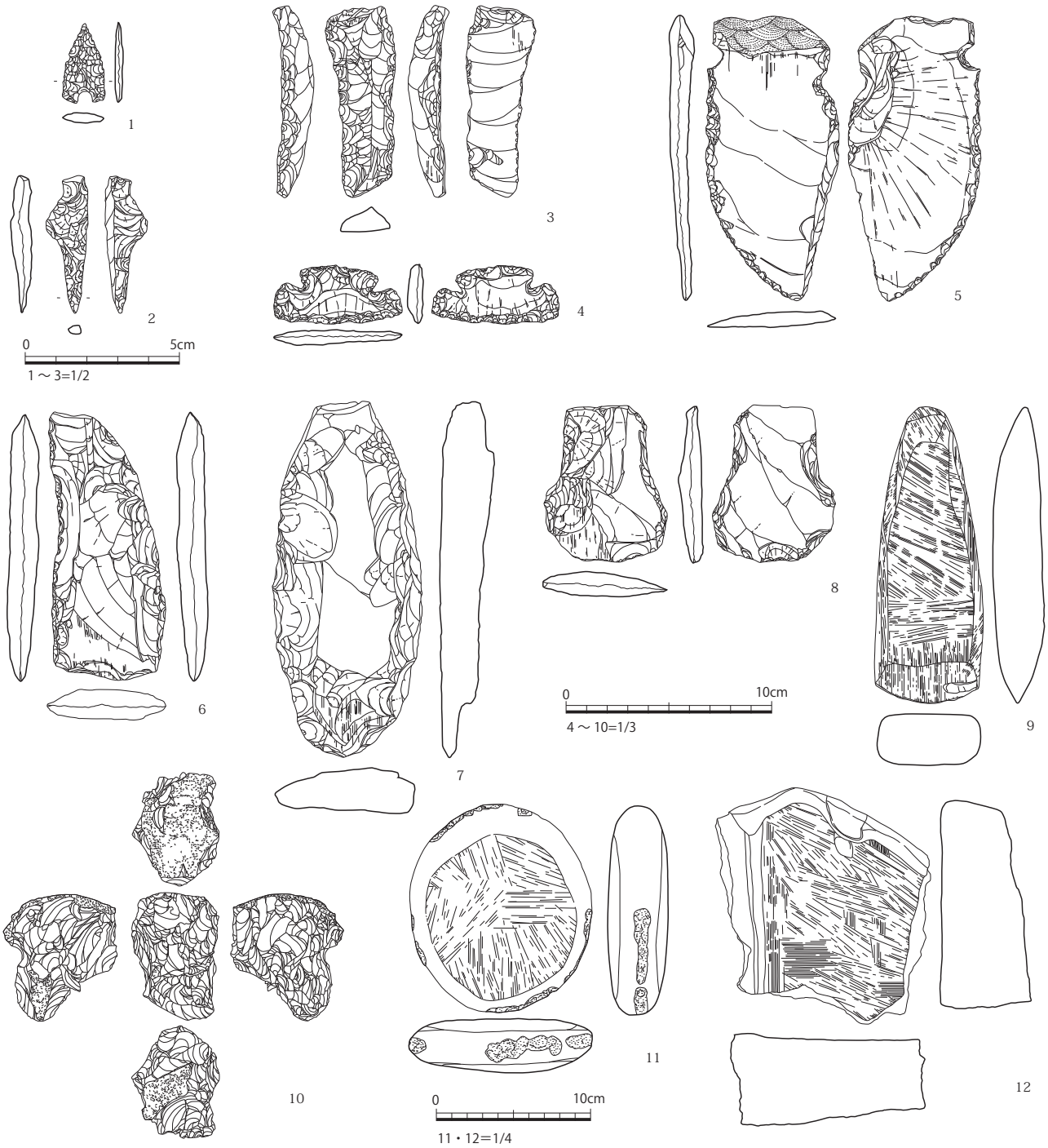
次に、浅鉢形土器に関しては、１類及び山形突起をもつ５類などが少量見られるほかは、２類、３類、４類が多く見られる。器面の調整や施文を見てみると、斜位の短沈線文を施すもの（第 15 図５）、凹線文を施すもの（同図６）や、２条の縦位の沈線の間に鋸歯状に沈線を施した精製の浅鉢形土器が見られる（同図 25）。



第 15 図　出土遺物実測図（5）（1/6）

土器型式についてみると１類が三万田式、２類・３類が三万田式から鳥居原式、５類が御領式の範疇に収まるであろう。

このほか少量ではあるが、椀形土器・高坏形土器・注口土器が出土している。椀形土器は１類と板状の底部を持つ２類があり、鳥居原式から御領式のものと考えられる。高坏形土器は脚部のみであり、分類が難しいが、三万田式から御領式、注口土器は注口のみの出土で体部形態などが不明なものの、三万田式から鳥居原式の範疇に収まるものと考えられる。



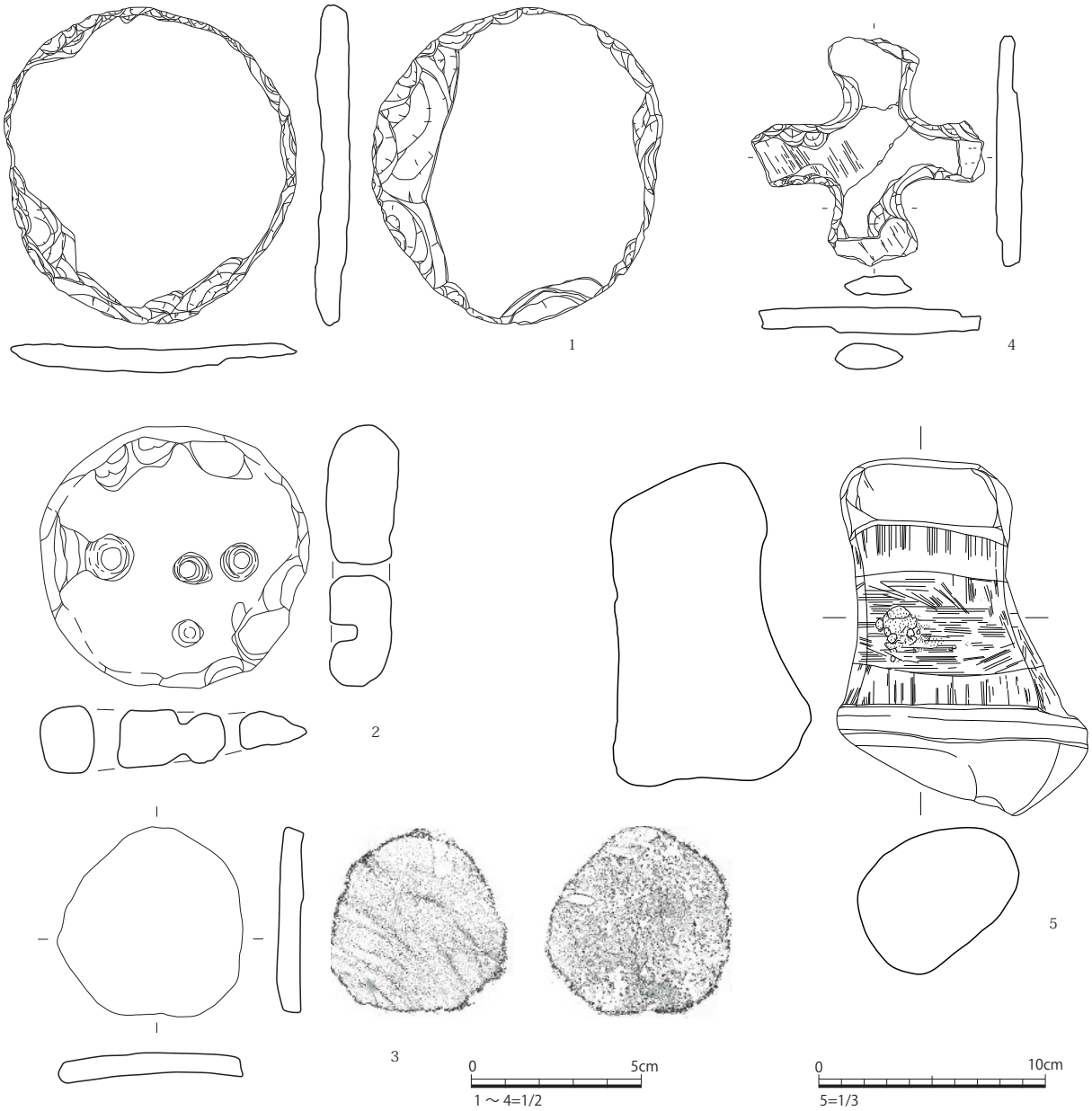
第 16 図　出土遺物実測図（6）（1/2・1/3・1/4）

続いて、土器以外の遺物についてみていく。

石器は大量に出土したが、最も多かったのは打製石斧である（総数約 450 点、第 16 図 6 ～ 8）。このほか、石核（第 16 図 10）や大型の剥片（総数約 20 点、同図 3）のほか、打製石鏃（総数約 10 点、同図 1）、石錐（1 点のみ、同図 2）、石匙（総数 2 点、同図 4・5）、磨製石斧（総数 6 点、同図 9）、石皿（総数 5 点、同図 12）、磨石（総数約 10 点、同図 11）などの狩猟具や加工具が中心に出土している。

また、祭祀に用いられたとみられる十字形石器（総数 2 点、第 17 図 4）、円盤状石製品（総数 11 点、同図 1）、石棒（同図 5）、円盤状穿孔石製品（1 点のみ、同図 2）のほか、円盤状土製品（1 点のみ、同図 3）が出土している。

なお、ここまで記述してきた土器の形式毎の点数や割合、石器の器種毎の点数については概数であり、諸事情により十分な検討はできていない。よって、今後の詳細な検討によりその数量や割合が変動する可能性があることを記しておく。



第 17 図　出土遺物実測図（7）（1/2・1/3）

Ⅳ　総括

前章までに遺構・遺物とその時期について述べてきたが、ここでは、その傾向や性格について考えてみたい。

遺構は、溝状遺構の上端とみられる部分を一部検出したのみであった。それ以外については、建物などが存在する可能性が否定できないものの、明確に確認することができなかった。この溝状遺構については、平成 17 年度の予備調査３トレンチで確認された２号溝の一部であると考えられる（第２図）。この調査の結果と今回確認された上端の位置関係から、溝状遺構が延びる方向は一定ではなく、大きく蛇行していたものと考えられる。

遺物の出土状況では、出土した遺物の量が南側で最も多く、北側へ向かうにつれて、少なくなっている。また、これらの遺物は大型の破片が多いことや器面の摩耗が少ないことなどから、出土位置とは異なる場所からの流れ込みとは考えにくく、この場所に廃棄されたものがそのまま残っていたと考えられる。

こうした土器の平面的な出土状況と時期的な土器型式の傾向では、完形に近い土器のうち、鳥居原式（深鉢形土器２類）の土器はＡ区からＥ区でまんべんなく出土しているのに対し、鳥居原式（浅鉢形土器２類・４類）、御領式（深鉢形土器３類）の土器はＡ区からＣ区、調査区の南側で集中して出土しているという特徴がある。全ての遺物の検討を行っていないことから、断定は難しいものの、大まかな傾向として捉えておきたい。

さらに加工具である大型の台石や石皿がＣ区の南端に近い位置で出土している（第７図）。この位置に近いＢ区北側では、磨石（第 16 図 11）も出土していることから、この付近は加工作業を行う場所、あるいは近隣の加工場所から廃棄された場所であったと想定される。

最後に祭祀系の遺物が出土した位置について検討する。第７図に示すように十字形石器や石棒、円盤状石製品の出土した位置がＣ区の台石と石皿を挟んで近い位置にある。また、Ａ区の南側やＥ区の中央付近では複数の円盤状石製品が近い位置で出土しており、同時に廃棄された可能性と祭祀を行った場所であった可能性の両方を想定しておきたい。いずれにしても本調査地付近にこうした祭祀を行う大きな集落があったことは間違いないだろう。また、平成 17 年度の予備調査では、本調査のＣ・Ｄ区に隣接する３トレンチの２号溝の埋土中から土偶が出土している。この遺構が今回の確認された溝状遺構と同じとすれば、本調査における遺物の出土状況から、Ａ～Ｃ区周辺で、祭祀などが行われていたとする、予備調査時点での推測を裏付けているものと思われる。

以上、今回の調査では、遺物の出土状況から、本調査地あるいはその近隣に加工や祭祀を行う場所が存在していたことが判明した。それと同時に、土器については少量ながらも三万田式がみられるものの、鳥居原式から御領式を主体としており、縄文時代後期後半から末という比較的存続期間の短い集落があったと考えられる。このことから、本調査地周辺は縄文人にとって暮らし易く、この場所を様々な行為に利用する拠点的な集落が本調査地近辺に存在していたと想定され、過去の調査例と比較しても日田盆地の中でもかなり大きな集落の一つであったと考えられる。

（参考文献）

島津義昭「黒色磨研土器様式」『縄紋土器大観』第４巻　1994

古森政次『ワクド石遺跡』熊本県文化財調査報告第 144 集　熊本県教育委員会　1994

水ノ江和同「北部九州の縄紋後・晩期土器 - 三万田式から刻目突帯文土器の直前まで -」『縄文時代』第８号　縄文時代文化研究会　1997

渡邉隆行「上井手遺跡」「平成 28 年度（2016 年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　2017

第１表　出土遺物観察表（1）

挿図番号	出土位置	種別	器種	法　量()は復元・残存				調　整		胎　土	焼成	色　調				備　考
				口径	胴部径	底径	器高	内面	外面			内面	Hue	外面	Hue	
第11図1	A-101	縄文	鉢	(11.2)	-	-	(21.6)	ヨコ方向ナデ	ヨコ方向丁寧なナデ・二枚貝内面による条痕調整・ヨコ方向ナデ・タテ方向の条痕調整からナデ調整	A・C・E・H	良好	黄橙色、明黄褐色	10YR7/8 10YR7/6	橙色、明褐色	7.5YR6/8 7.5YR5/8	(内)全体の１/２程度の黒斑（うすい）(外)胴部中央にスス付着、刺突文４ケ所
第11図2	E-7	縄文	深鉢	(27.6)	-	-	(17.2)	ナデ・二枚貝外面による条痕調整後ナデ	ナデ・二枚貝外面による条痕調整後ナデ	B・C・G	良好	黒褐色にぶい黄褐色	10YR3/1 10YR5/4	黒色にぶい黄褐色	10YR2/1 10YR5/3	黒色研磨土器、口縁部、頸部ともに３単位もしくは４単位の刺突文が施される
第11図3	B-87	縄文	深鉢	32.8	-	-	(20.7)	二枚貝内面による条痕調整後ナデ	丁寧なナデ	A・C・E・H	良好	明黄褐色 黄橙色 黒褐色	10YR7/6 10YR7/8 10YR3/1	黒褐色	10YR3/1	(外)凹線気味の沈線あり、ほぼ全面にスス付着(内)ほぼ全面黒斑一部反転合成
第11図4	A-17	縄文	鉢	(17.1)	-	-	(18.2)	ヨコ方向ナデ・二枚貝内面による条痕調整・ヨコ方向ナデ・タテ方向ナデ	ヨコ方向ナデ・二枚貝内面による条痕調整	B・C・G	良好	にぶい赤褐色 黒褐色	5YR5/4 5YR2/1	赤褐色 黒褐色	5YR4/6 5YR3/1	(内)種子痕あり
第11図5	B101	縄文	深鉢	(22.0)	-	-	(14.6)	ナデ	二枚貝による条痕調整後研磨・ナデ	A・C・E	良好	褐灰色	7.5YR4/1	黒褐色	2.5Y3/2	外面一部黒色化
第11図6	B-89	縄文	深鉢	(23.6)	-	-	(12.8)	二枚貝による条痕調整後ナデ	ナデ・二枚貝による条痕調整後研磨	A・C	良好	灰黄色	2.5Y6/2	にぶい黄色	2.5Y6/3	外面に凹線
第11図7	A-52	縄文	深鉢	-	-	-	(24.1)	二枚貝による条痕調整後ヨコ方向研磨、ナデ	二枚貝による条痕調整後ヨコ方向研磨、ナデ	A・C・E	良好	にぶい橙色	7.5YR6/3	暗褐色	7.5YR3/3	外面一部黒色化、上部に凹線
第11図8	E-14	縄文	鉢	(32.4)	(32.6)	-	(11.4)	二枚貝による条痕調整後ヨコ方向研磨	二枚貝による条痕調整後ヨコ方向研磨	A・B・C	良好	褐灰色	10YR5/1	にぶい黄色	2.5Y6/3	研磨は非常に丁寧
第11図9	A-88	縄文	鉢					二枚貝による条痕調整後ヨコ方向研磨	二枚貝による条痕調整後ヨコ方向研磨	A・B・C	良好	にぶい橙色	7.5YR6/3	にぶい黄橙色	10YR7/3	
第11図10	C	縄文	鉢	(17.8)	-	-	4.3	二枚貝外面による条痕調整	研磨 部分的に炭素吸着	A・C	良好	灰褐色	7.5YR6/2	灰褐色	7.5YR5/2	内面の条痕調整はある程度の乾燥状態の中で行われ、丁寧に行われる。口縁部は凹線文の後にへら状工具による綾杉状の短沈線が施される。
第11図11	A	縄文	深鉢	-	-	-	(7.5)	ナデ調整	2枚内面による条痕調整	A・B・C	良好	にぶい黄橙色	10YR7/2	にぶい黄橙色	10YR7/3	細いヘラ状工具による多状沈線文を施す
第11図12	C-75	縄文	深鉢	(27.8)	(29.0)	-	(16.6)	ナデ	二枚貝による条痕調整明瞭に残る	A・C	良好	灰黄色	2.5Y6/2	暗灰黄色	2.5Y5/2	
第11図13	B-16	縄文	鉢	(28.2)	-	-	(8.3)	二枚貝による条痕調整後ナデ	二枚貝による条痕調整後研磨	A・B・C	良好	にぶい黄褐色	10YR5/4	黒褐色	10YR3/2	外面一部凹線
第11図14	B-55	縄文	深鉢	(29.4)	-	-	(11.7)	二枚貝による条痕調整後ヨコ方向ナデ	ナデ・一部研磨・二枚貝による条痕調整後ヨコ方向ナ	A・B・C	良好	にぶい黄橙色	10YR6/4	黒褐色 暗褐色	5YR2/1 10YR3/3	外面一部凹線
第11図15	D-40	縄文	鉢	(23.6)	-	-	(8.5)	二枚貝による条痕調整後ナデ	二枚貝による条痕調整後研磨	A・C・H	良好	にぶい橙色	7.5YR6/4	黄灰色	2.5Y4/1	内外面一部に凹線
第11図16	一括	縄文	鉢	(15.2)	-	-	5.1	二枚貝外面による条痕調整後研磨・炭素吸着による黒色化	二枚貝外面による条痕調整後研磨・炭素吸着による黒色化	A・B・E	良好	褐灰色	5YR5/1	灰褐色	5YR5/2	口縁部、2状の沈線後ヘラ状工具による綾杉状短沈線（キザミ）を施し、巻貝先端部による刺突文を施す
第11図17	C-129 C-123	縄文	-	(21.3)	-	-	5.5＋α	研磨	研磨	A・B・D	良好	褐灰色	5YR6/1	褐灰色	5YR4/1	口縁部に凹線文上に６単位の刺突文を施す
第12図1	B-39	縄文	深鉢	(27.0)	-	6.6	39.0	ヨコ方向二枚貝による条痕調整後ナデ・二枚貝による条痕調整後ナデ・ナデ	ヨコ方向二枚貝による条痕調整後ナデ・タテ方向二枚貝による条痕調整後ナデ・ナデ	B・E・G	良好	橙色 褐色	7.5YR7/6 7.5YR6/1	明黄褐色	10YR7/6	外面屈曲部より上に強い火を受け白色化している個所見られる
第12図2	B-7・8	縄文	深鉢(粗製)	(29.1)	-	-	32.3＋α	二枚貝による条痕調整後ナデ・二枚貝によるヨコ方向ナデ	ナデ	B・C・E・G	良好	にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい褐色 黒褐色	7.5YR5/4 7.5YR3/1	内面底部周辺のススは煮沸時のコゲ
第12図3	A-46	縄文	深鉢	(25.0)	(26.7)	-	(27.2)	二枚貝による条痕調整後研磨・二枚貝による条痕調整後ナデ	ナデ・二枚貝による条痕調整後上半ヨコ方向ナデ、下半タテ方向ナデ	A・C・E	良好	暗褐色	10YR3/3	暗褐色 橙色	7.5YR3/3 5YR6/6	口唇部・内面に凹線外面一部黒色化
第12図4	C-90	縄文	深鉢	(34.4)	(29.0)	-	(20.5)	二枚貝による条痕調整後ナナメ方向ナデ	ナデ・二枚貝による条痕調整後ヨコ方向ナデ、タテ方向ナデ	A・C・E	良好	にぶい橙色	7.5YR6/3	暗褐色	7.5YR3/3	外面スス付着
第12図5	A-17	縄文	深鉢	(33.6)	(31.4)	-	(18.3)	二枚貝による条痕調整後ヨコ方向研磨	二枚貝による条痕調整後ヨコ方向研磨	A・B・C	良好	にぶい黄橙色	10YR6/3	暗褐色	10YR3/4	外面大部黒色化
第12図6	C-125 C-113	縄文	深鉢	(27.2)	(21.6)	-	(21.6)	二枚貝による条痕調整後上半ヨコ方向ナデ下半は条痕残る	二枚貝による条痕調整後上半ヨコ方向ナデ下半研磨	A・C	良好	黄灰色	2.5Y4/1	灰褐色 黒色	7.5YR4/2 7.5YR2/1	内面は炭素吸着による黒色化
第12図7	B-51	縄文	深鉢	(28.6)	-	-	(16.6)	ヨコ方向ナデ・丁寧なナデ・粗いナデ	ヨコ方向ナデ・ナデ・ヨコ方向ナデ・二枚貝外面による条痕調整	B・C・F	やや不良	にぶい黄橙色	10YR7/3	黒褐色 にぶい黄橙色	10YR3/1 10YR6/4	内面に植物・種子痕が多く残る
第12図8	E-24	縄文	深鉢	(32.2)	(31.2)	-	(29.1)	-	-	A・B・C	良好	黒褐色	5YR3/1	褐色	7.5YR4/4	
第12図9	A-36	縄文	深鉢	(26.8)	(23.0)	-	(20.6)	二枚貝による条痕調整後ヨコからナナメ方向ナデ	二枚貝による条痕調整後ヨコからナナメ方向ナデ	A・C・E	良好	灰黄褐色	10YR5/2	にぶい黄色	2.5Y6/3	
第12図10	A-12 A-15	縄文	深鉢	(27.8)	(25.2)	-	(15.5)	二枚貝による条痕調整後ヨコ方向ナデ	ナデ・二枚貝による条痕調整後研磨	A・C	良好	にぶい黄橙色	10YR6/3	灰黄褐色	10YR5/2	外面一部黒色化
第12図11	A-2	縄文	深鉢	(25.2)	(18.4)	-	(16.6)	二枚貝による条痕調整後ヨコ方向ナデ・沈線	ナデ・二枚貝による条痕調整後ヨコ方向研磨	A・C・E	良好	暗灰黄色	2.5Y5/2	黒褐色 にぶい褐色	10YR3/2 7.5YR5/4	内面一部黒色化
第12図12	B-87	縄文	深鉢	(25.0)	(22.6)	-	(17.4)	二枚貝による条痕調整後ナナメ、ヨコ方向研磨	二枚貝による条痕調整後ナナメ、ヨコ方向研磨	A・C・E	良好	オリーブ褐色	2.5Y4/4	暗褐色 にぶい橙色	10YR3/3 7.5YR6/4	内外ともに一部黒色化
第12図13	C-121	縄文	深鉢	(20.2)	(19.0)	-	(19.5)	ヨコ方向ナデ	二枚貝による条痕調整後ヨコ方向ナデ、ナナメヨコ方向ナデ	A・B・C・E	良好	暗褐色	7.5YR3/3	褐色	7.5YR4/3	
第12図14	B-57	縄文	深鉢	(20.6)	(18.6)	-	(18.8)	二枚貝による条痕調整後ナデ	ナデ・二枚貝による条痕調整後ナデ	A・B・C	良好	灰黄褐色	10YR4/2	褐色 黒褐色	10YR4/4 2.5Y3/2	
第12図15	C-80	縄文	深鉢(粗製)	(29.0)	-	-	(28.7)	二枚貝内面による条痕調整・ナデ	ナデ・二枚貝内面による条痕調整後ナデ・二枚貝内面による条痕調整	A・C・I	良好	にぶい黄橙色 にぶい黄褐色	10YR10/4 10YR5/4	明褐色 褐色 黒褐色	7.5YR5/6 7.5YR5/4 7.5YR3/1	黒斑は一次焼成時

法量の単位はcm。（）書きは、残存と復原を表す。
胎土：A角閃石　B石英　C長石　D赤色粒子　E白色粒子　F黒色粒子　G雲母　H砂粒

第２表　出土遺物観察表（2）

挿図番号	出土位置	種別	器種	法　量()は復元・残存				調　整		胎　土	焼成	色　調				備　考
				口径	胴部径	底径	器高	内面	外面			内面	Hue	外面	Hue	
第13図1	A-22	縄文	鉢	(31.6)	-	-	(14.3)	ナデ・二枚貝内面による条痕調整後ナデ	ナデ・二枚貝内面による条痕調整後ナデ・ナデ	B・E・G	良好	暗灰黄色	2.5Y4/2	橙色 褐灰色	7.5YR6/6 7.5YR4/1	(外)２次被熱 (内)種子痕あり 炭素吸着による黒色化、反転復元
第13図2	A-46	縄文	深鉢	(28.4)	(29.8)	-	(14.7)	ナデ・二枚貝による条痕調整後ナデ	二枚貝による条痕調整後ヨコ方向丁寧なナデ	A・C・E	良好	黄灰色	2.5Y6/1	暗褐色	10YR3/3	内面大部分黒色化 口唇部、内面に凹線
第13図3	B-6	縄文	鉢	(22.0)	(26.0)	-	-	二枚貝による条痕調整後研磨	ナデ・二枚貝による条痕調整後研磨	A・C	良好	黒褐色	10YR3/2	黒褐色	7.5YR3/1	全体に黒色化 外面凹線、刺突文 内面口唇部沈線
第13図4	B-79	縄文	深鉢	-	-	-	(29.6)	二枚貝による条痕調整後ナナメ方向ナデ	ナデ・二枚貝による条痕調整後ヨコ方向ナデ	A・C	-	暗褐色	7.5YR3/3	灰黄色	2.5Y6/2	外面のナデは雑、条痕残る。スス付着 反転復元
第13図5	A-25	縄文	鉢	(25.0)	-	-	(14.3)	巻貝腹縁による条痕調整後に粗いナデ	巻貝腹縁による条痕調整後に粗いナデ	B・C・G・I	やや不良	黄褐色 黒褐色	2.5Y5/3 10YR3/1	褐灰色 にぶい褐色	10YR4/1 7.5YR5.3	内外面ともにスス付着、植物種子痕あり
第13図6	B-64	縄文	深鉢	(30.6)	(22.2)	-	(21.3)	二枚貝による条痕調整後ヨコ方向ナデ・胴部付近にケ	二枚貝による条痕調整後ヨコ方向ナデ	A・C・E	-	灰黄褐色	10YR5/2	褐色	10YR4/4	外面、炭素付着による黒色化
第13図7	A-31 A-43	縄文	深鉢	(33.8)	(26.7)	-	(13.9)	二枚貝による条痕調整後ヨコ方向ナデ	二枚貝による条痕調整後ヨコ方向ナデ	A・C・G	良好	浅黄色	2.5Y7/4	灰黄褐色	10YR5/2	内外面一部黒色化
第13図8	B-31	縄文	深鉢	(31.4)	-	-	(19.5)	二枚貝による条痕調整後ナデ	ナデ・二枚貝による条痕調整後ナデ	B・C	良好	黄褐色	2.5Y5/3	にぶい黄色	2.5Y6/3	外面一部黒色化
第13図9	C-12	縄文	深鉢	(23.2)	-	-	(13.5)	二枚貝による条痕調整後ナデ	二枚貝による条痕調整後ほぼ未調整	A・B・C	良好	黄褐色	2.5YR5/3	灰黄褐色	10YR4/2	
第13図10	B-55	縄文	深鉢 (粗製)	(30.8)	-	(8.0)	(29.7)	ヨコ方向ナデ・二枚貝による条痕調整	ヨコ方向ナデ・二枚貝による条痕調整	B・C・E・G・I	良好	にぶい黄橙色 黒褐色	10YR7/4 10YR3/1	褐色 褐灰色	10YR3/1 7.5YR5/1	内面煮沸により器壁が荒れている
第13図11	F-8	縄文	鉢	(22.8)	(22.2)	-	(13.4)	ナデ? 器面ハクリあり不明瞭	二枚貝による条痕調整後ナナメ方向ナデ・ナデ	A・B・C	良好	黄灰色	2.5Y4/1	褐色	7.5YR4/3	
第13図12	C-29	縄文	鉢	(18.0)	(12.8)	-	(10.1)	二枚貝による条痕調整後ヨコ方向ナデ	ナデ・二枚貝による条痕調整後上半ヨコ方向ナデ下半タテ方向ナデ	A・C・E・G	良好	にぶい橙色	7.5YR6/3	暗褐色	7.5YR3/3	
第13図13	A-44	縄文	深鉢	-	-	-	(20.0)	二枚貝による条痕調整後ナデ	二枚貝による条痕調整後ナデ	A・C・E	良好	灰黄褐色	10YR5/2	にぶい黄色	2.5Y6/3	内面一部黒色化 外面一部炭素吸着による黒色化
第13図14	C-54	縄文	深鉢	-	-	-	(14.0)	ヨコ方向丁寧なナデ・ナナメ方向ナデ	ヨコ方向丁寧なナデ・タテ方向ナデ	A・C	良好	黄灰色	2.5Y4/1	暗褐色	7.5YR3/3	外面下半は二枚貝による条痕調整不明瞭だが見える
第13図15	B-67	縄文	深鉢	-	-	-	(14.3)	研磨・二枚貝による条痕調整後ナデ	ナデ・二枚貝による条痕調整後ナデ	A・B・C	良好	にぶい橙色	7.5YR6/3	暗褐色	7.5YR3/3	外面一部炭素付着による黒色化 補修孔あり
第13図16	B-36	縄文	深鉢	-	-	-	(15.7)	ナデ	ナデ・二枚貝による条痕調整後ナデ	C・E	良好	黄灰色	2.5Y5/1	オリーブ褐色	2.5Y4/4	内部一部凹線 外面一部黒色化
第13図17	A-78	縄文	深鉢	-	-	-	(18.1)	ヨコ方向ナデ	二枚貝による条痕調整後上半ヨコ方向研磨、下半ナナメ方向研磨	A・B・C・D	良好	暗褐色	10YR3/4	褐色	7.5YR4/3	
第13図18	B-61	縄文	深鉢	-	-	-	(17.0)	二枚貝による条痕調整後ナデ	二枚貝による条痕調整後粗いナデ(条痕残る)	A・C	良好	灰黄色	2.5Y6/2	にぶい黄橙色	10YR6/3	
第13図19	C-18	縄文	深鉢	-	-	-	(29.5)	二枚貝による条痕調整後ヨコ方向ナデ	二枚貝による条痕調整後ヨコ方向ナデ	A・C・E・G	やや不良	黄灰色	2.5Y4/1	灰褐色 黒色	7.5YR4/2 7.5YR2/1	外面に明瞭な接合痕
第13図20	A-30	縄文	深鉢	-	-	-	(26.1)	ナデ	二枚貝による条痕調整後ナデ	A・C・E	良好	黒褐色	2.5Y3/2	暗褐色 にぶい黄橙色	10YR3/3 10YR6/3	外面一部黒色化
第13図21	B-1	縄文	深鉢	-	-	-	(28.7)	二枚貝による条痕調整後ナデ	二枚貝による条痕調整後ナデ	A・B・C	良好	黄褐色	2.5Y5/3	灰黄褐色	10YR5/2	外面一部炭素付着による黒色化 内面一部黒色化
第13図22	B-58	縄文	深鉢	-	-	-	(22.0)	ナデ	二枚貝による条痕調整後ヨコ方向ナデ	A・B・C	良好	にぶい黄橙色	10YR7/3	灰黄色	2.5Y6/2	外面一部黒色化
第13図23	B-70	縄文	深鉢				(12.7)	二枚貝による条痕調整後ナナメ方向研磨	ナデ・二枚貝による条痕調整後ヨコ方向研磨、タテ方向研磨	A・C・E	良好	灰黄色	2.5Y6/2	オリーブ褐色	2.5Y4/6	外面一部黒色化
第13図24	E-28	縄文	深鉢	-	-	-	(12.5)	ヨコタテ	ヨコ方向・二枚貝による条痕調整・ナナメ方向	A・B・C	良好	黄灰色	2.5Y4/1	灰褐色 黒色	7.5YR4/2 7.5YR2/1	条痕調整痕、明瞭に残る
第13図25	C-102	縄文	深鉢	-	-	-	(17.9)	二枚貝による条痕調整後ナデ	二枚貝による条痕調整後ヨコ方向研磨	A・B・C	良好	にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい黄橙色	10YR6/3	外面一部スス付着
第13図26	A-24	縄文	深鉢				(19.0)	二枚貝による条痕調整後ヨコ方向研磨、ナデ	二枚貝による条痕調整後研磨	A・B・C	良好	にぶい黄橙色	10YR5/4	灰黄褐色	10YR4/2	補修孔あり
第14図1	C-44	縄文	深鉢	-	(27.6)	-	(19.7)	二枚貝による条痕調整後ヨコ方向ナデ	二枚貝による条痕調整後ヨコ方向丁寧なナデ(但し、条痕は明瞭)	A・B・C	良好	にぶい黄橙色	10YR7/2	灰黄褐色 にぶい黄橙色	10YR4/2 10YR5/4	内外ともに一部黒色化
第14図2	A-98	縄文	深鉢	-	(20.6)	-	(19.0)	二枚貝による条痕調整後ヨコ方向ナデ	二枚貝による条痕調整後ヨコ方向研磨・ヨコ方向ナデ	A・B・C	良好	灰黄褐色	10YR9/2	褐色	7.5YR4/4	外面一部黒色化
第14図3	D-26	縄文	深鉢	-	(30.6)	-	(18.9)	二枚貝による条痕調整後ヨコ方向ナデ、ナナメ方向ナ	二枚貝による条痕調整後ナナメ方向ナデ	A・C・E	良好	灰黄褐色～褐灰色	10YR5/2～10YR4/1	黒褐色～明赤褐色	5YR2/1～5YR5/1	
第14図4	C-93	縄文	鉢	-	-	6.8	(3.3)	ナデ	二枚貝による条痕調整後研磨ナデ	A・C	良好	にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい黄橙色	10YR6/4	一部スス付着
第14図5	C-54	縄文	鉢	-	-	3.7	(2.5)	ナデ	ナデ	A・C	良好	にぶい黒褐色	10YR5/4	にぶい黒褐色	10YR5/3	
第14図6	C-62	縄文	鉢	-	-	3.9	(2.2)	ナデ	ナデ	A・C・H	良好	灰黄色	2.5Y6/2	浅黄色	2.5Y7/3	内面一部黒色化
第14図7	C-3	縄文	鉢	-	-	10.1	(2.1)	ナデ	ナデ	A・C・D	良好	にぶい黄橙色	10YR7/2	浅黄橙色	10YR8/4	内面一部黒色化
第14図8	C-48	縄文		-	-	3.8	(1.8)	ナデ	ナデ	A・C	良好	灰黄褐色	10YR6/2	にぶい橙色	7.5YR7/3	
第14図9	B-75	縄文	鉢	-	-	5.3	(2.1)	ナデ	研磨	A・C	良好	灰色	5Y4/1	にぶい黄褐色	10YR4/3	
第14図10	B-7	縄文	浅鉢 (精製)	-	-	-	(2.8)	丁寧なナデ	凹線・ナデ・研磨	A・C・G	良好	褐灰色	10YR4/1	にぶい黄褐色～褐灰色	10YR5/4～10YR4/1	内面は1次焼成時の黒斑 外面は部分的に炭素吸着か？
第14図11	B-84	縄文	鉢	-	-	3.0	(2.3)	研磨	研磨・ナデ	A・C・E	良好	褐灰色	10YR5/1	にぶい黄色	2.5Y6/3	
第14図12	A-78	縄文	鉢	-	-	9.2	(7.8)	ナデ	二枚貝による条痕調整後タテ方向ナデ・ナデ	A・B・C	良好	にぶい橙色	7.5YR6/3	暗褐色	7.5YR3/3	内面炭素付着による黒色化
第14図13	A-27	縄文	深鉢	-	-	5.8	(8.4)	ススによる黒色化・二枚貝による横方向の条痕調整・ナデ	ススによる黒色化・二枚貝による条痕調整	A・C・G・I	良好	にぶい黄橙色～黒褐色	10YR5/3～10ＹＲ3/1	にぶい黄橙色～褐灰色	10YR7/4～10YR5/1	ある程度土器が乾燥した状態で2枚貝による条痕調整を行う。その為ミガキに近い調整となっている
第14図14	B-82	縄文	鉢			7.3	(5.9)	二枚貝による条痕調整後ナデ	二枚貝による条痕調整後ナデ・ナデ	A・B・C	良好	にぶい黄色	2.5Y6/3	灰黄色	2.5Y6/2	内面一部黒色化
第14図15	E-ヒ	縄文	深鉢	-	-	3.0	(8.9)	ナデ	ナデ	A・B・C	良好	にぶい黄橙色	10YR5/3	にぶい黄橙色	10YR7/4	外面一部スス付着
第14図16	B-北ﾍﾞﾙﾄ	縄文	深鉢	-	-	4.8	(10.3)	二枚貝による条痕調整後ナデ	二枚貝による条痕調整後研磨・ナデ	A・B・C	良好	浅黄色	2.5Y7/3	浅黄色	2.5Y7/3	外面一部黒色化、炭素吸着 内面小石抜けあり
第14図17	B-68	縄文	鉢	-	-	7.5	(8.4)	二枚貝による条痕調整後ナデ	二枚貝による条痕調整後タテ方向ナデ・ナデ	A・B・C	良好	にぶい黄色	2.5Y6/4	にぶい褐色	7.5YR3/3	内面一部黒色化 接合痕、明瞭に残る
第14図18	B-53	縄文	深鉢	-	-	6.4	(10.2)	ナデ	二枚貝による条痕調整後タテ方向研磨・ナデ	A・B・C	良好	灰黄色	2.5Y7/2	にぶい橙色	7.5YR6/4	
第14図19	B-7	縄文	深鉢	-	-	5.1	(8.9)	-	-	A・C・E	良好	黄灰色	2.5Y5/1	黄灰褐色	10YR5/2	
第14図20	C-126	縄文	鉢	-	-	6.1	(9.4)	二枚貝条痕調整後ナデ調整・部分的にススが付着	縦方向に二枚貝による条痕調整・2次被熱と部分的にススが付着	C・G・E	良好	褐灰色～にぶい橙色	7.5YR4/1～7.5TR6/4	橙色	2.5YR6/6	内面煮沸により器面が荒れている。
第14図21	B-2	縄文	鉢	-	-	10.0	(9.0)	二枚貝によるタテ方向・ヨコ方向の条痕調整	二枚貝によるタテ方向の条痕調整	A・B・C	良好	にぶい赤褐色	7.5R5/3	赤褐色	10R5/4	

法量の単位はcm。（）書きは、残存と復原を表す。
胎土：A角閃石　B石英　C長石　D赤色粒子　E白色粒子　F黒色粒子　G雲母　H砂粒

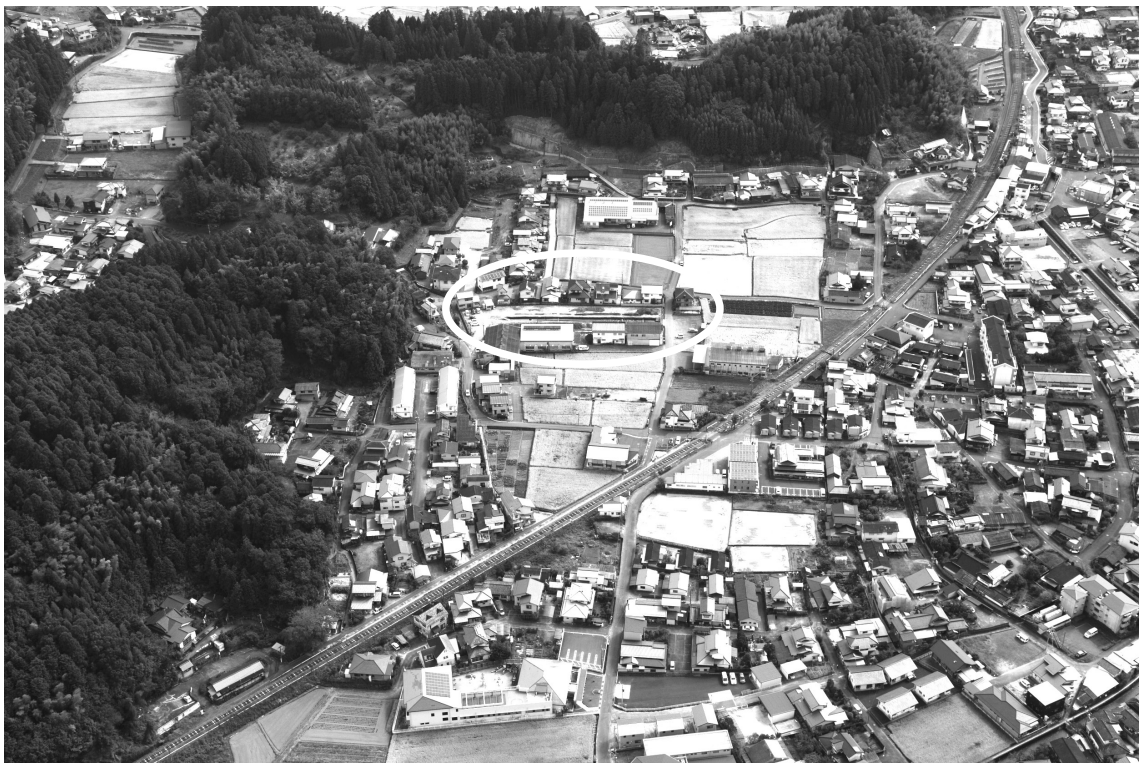
第３表　出土遺物観察表（3）

挿図番号	出土位置	種別	器種	法　量()は復元・残存				調　整		胎　土	焼成	色　調				備　考
				口径	胴部径	底径	器高	内面	外面			内面	Hue	外面	Hue	
第14図22	C-116	縄文	深鉢	-	-	7.6	(5.9)	ナデ	二枚貝による条痕調整後研磨・ナデ	C・G・H	良好	浅黄橙色	7.5YR8/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	
第14図23	A-87 B-10	縄文	深鉢	-	-	10.4	(14.3)	丁寧なナデ・ナデ	二枚貝外面による条痕調整後に粗いナデ・ケズリ・ナデ	A・C・E・H	良好	橙色 黄橙色	7.5YR7/6 7.5YR7/8	明黄褐色 黄橙色	10YR7/6 10YR7/8	(内)スス付着、被熱により器壁剥離 (外)部分的に黒斑あり
第14図24	A-71	縄文	鉢	-	-	4.7	(12.0)	二枚貝による横方向の条痕調整・二枚貝による縦方向の条痕調整	二枚貝による横方向の条痕調整・二枚貝による縦方向の条痕調整	A・B・C・G	良好	黒褐色～にぶい黄褐色	10YR3/2～YR5/4	橙色～赤灰色	2.5YR6/6～2.5YR4/1	ある程度土器が乾燥した状態で2枚貝による条痕調整を行う。その為ミガキに近い調整となっている
第14図25	C-102	縄文	鉢	-	-	6.3	(5.3)	ナデ	二枚貝による条痕調整後研磨	A・B・C	良好	黄灰色	2.5Y5/1	オリーブ褐色	2.5Y4/4	外面一部黒色化炭素付着か
第15図1	A-北ﾍﾞﾙﾄ	縄文	鉢	-	-	-	(9.4)	ヨコ方向・タテ方向	二枚貝による条痕調整後研磨	A・C	良好	暗褐色	10YR3/4	褐色	7.5YR4/3	外面凹線、刺突あり
第15図2	C-14	縄文	浅鉢	-	-	-	(6.1)	二枚貝による条痕調整後ナデ	ナデ・二枚貝による条痕調整後ナデ	A・C・G	良好	灰黄色	2.5Y6/2	にぶい黄橙色	10YR6/3	内面一部黒色化 外面一部凹線、一部炭素付着
第15図3	B-86	縄文	鉢	-	-	-	(7.3)	二枚貝による条痕調整後ナデ	二枚貝による条痕調整後ナデ	A・B・C	良好	にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR6/3	外面一部炭素付着による黒色化
第15図4	C-54	縄文	鉢	(40.4)	-	-	(13.9)	ナデ・ヨコ方向ナデ	ナデ・タテ方向ナデ	A・C・E	良好	にぶい赤褐色	7.5R5/3	赤褐色	10R5/4	一部スス付着
第15図5	B-南ﾍﾞﾙﾄ	縄文	鉢	-	-	-	(3.5)	ナデ・二枚貝内面による条痕調整	斜位の短沈線	C・E	良好	褐灰色	5YR5/1	灰白色	10YR8/2	肥厚させた口縁部に斜位の短沈線文を施す
第15図6	B-78	縄文	鉢	(29.2)	-	-	(5.8)	二枚貝による条痕調整後ナデ	二枚貝による条痕調整後ナデ	A・B・C	良好	浅黄色	2.5Y7/3	浅黄色	2.5Y7/3	内外ともに一部黒色化 口唇部・外面に凹線
第15図7	A	縄文	浅鉢	-	-	-	(3.9)	ナデ	ナデ	A・B・E・H	良好	黒褐色	2.5Y3/1	黒褐色	2.5Y3/1	渦巻状沈線と短沈線の組み合わせ。施文後に炭素吸着により黒色化
第15図8	D-北ﾍﾞﾙﾄ	縄文	浅鉢	(31.0)	-	-	(4.6)	二枚貝による条痕調整後研磨	二枚貝による条痕調整後研磨	A・B・C・E	良好	灰黄褐色	10YR6/2	灰褐色	7.5YR6/2	内外面とも二枚貝による条痕調整ののちに研磨。薄く黒色化する。口縁部は４単位の山形口縁と刺突文を２列施す。頸部の刺突は２単位か。
第15図9	A-38	縄文	浅鉢	(24.8)	-	-	(6.3)	二枚貝による条痕調整後ナデ	二枚貝による条痕調整後ナデ	A・C・E・F	良好	にぶい黄褐色	10YR5/3～5/4	にぶい褐色	7.5YR5/3～5/4	(外)ほぼ全面にスス付着（２次焼成によるものか）刺突文２個１対１ヶ所
第15図10	C	縄文	鉢	(30.4)	-	-	(6.7)	二枚貝による条痕調整後ナデ、その後研磨	ナデ・二枚貝による条痕調整後ナデ	A・B・C・I	良好	黒色	5Y2/1	にぶい黄褐色 褐灰色	10YR5/4 10YR4/1	４単位の山形口縁、その波頂部下に２列の刺突文 内面にのみ研磨による黒色化が見られる 外面は口縁部付近にススが付着
第15図11	C-107	縄文	浅鉢	(12.5)	-	-	(7.3)	二枚貝による条痕調整後丁寧なナデ	二枚貝による条痕調整後ナデ、その後研磨	B・E・G	良好	黄灰色	2.5Y4/1	灰褐色 黒色	7.5YR4/2 7.5YR2/1	口縁部２条の凹線気味の沈線文 外面のみ研磨がおこなわれる
第15図12	A-40	縄文	浅鉢	24.1	-	-	(10.1)	タテ方向に丁寧なナデ	ヨコ方向に丁寧なナデ	A・C・E・H	良好	にぶい橙色 にぶい褐色 黒褐色	7.5YR6/4 7.5YR5/4 7.5TR2/2	褐色 暗褐色	7.5YR4/4 7.5YR3/4	炭素吸着による黒色化が一部見られる 刺突文 １対１ヶ所
第15図13	C-10	縄文	浅鉢	(16.2)	-	-	(5.1)	ナデ	研磨	C・I	良好	褐灰色～にぶい黄橙色	7.5YR6/1～10YR7/2	褐灰色～灰黄褐色	10YR4/1～10YR6/2	外面から口縁内面は薄く炭素吸着か？
第15図14	E-7	縄文	浅鉢	(20.4)	-	-	(4.7)	二枚貝外面による条痕調整・研磨	ナデ	B・C・E	良好	黒	10YR*1.7/1	褐灰色	10YR4/1	4単位の山形口縁、口縁部と屈曲部の間に沈線文2条。内外面とも炭素吸着による黒色化
第15図15	B-91	縄文	浅鉢	(17.8)	-	-	(6.5)	二枚貝による条痕調整後ナデ	二枚貝による条痕調整後研磨	A・B・C	良好	灰黄褐色	10YR5/2	にぶい黄褐色	10YR5/4	
第15図16	C-47 C-テ	縄文	鉢	(29.2)	-	-	(5.7)	二枚貝による条痕調整後ヨコ方向ナデ、タテ方向ナデ	ナデ・二枚貝による条痕調整後ヨコ方向ナデ	A・C・E	良好	黄灰色	2.5Y4/1	赤褐色	10R5/4	補修孔あり
第15図17	-	縄文	-	-	-	-	-	-	-	-	-	黄灰色	2.5Y4/1	暗褐色	7.5YR3/3	
第15図18	A-下層	縄文	浅鉢	(15.0)	-	(3.1)	8.4	スス付着.二枚貝内面による条痕調整後ナデ調整・ナデ調整	二枚貝条痕調整後ナデ調整・スス付着・ナデ調整	B・C・I	良好	褐灰色～にぶい褐色	7.5YR4/1～7.5TR5/4	黒褐　にぶい褐色	7.5YR3/1～7.5YR7/4	外面はスス付着による黒色化
第15図19	C-76	縄文	浅鉢	(14.2)	-	(11.8)	(7.6)	赤色顔料付着	条痕調整後に丁寧なナデ調整、一部炭化物付着・二枚貝による条痕調整後ナデ調整	B・C・G	良好	灰黄褐色	10YR5/2	にぶい黄橙	10YR6/3	内面赤色顔料付着、赤色顔料容器か？
第15図20	B-23	縄文	浅鉢	(13.2)	-	-	(7.7)	二枚貝もしくは棒状工具を使用しての研磨（ヨコ方向）・タテ方向の研磨	二枚貝もしくは棒状工具を使用しての研磨（ヨコ方向）・タテ方向の研磨	A・B・I	良好	にぶい赤褐色	7.5R5/3	赤褐色	10R5/4	部分的に炭素吸着
第15図21	B-63	縄文	鉢		(23.8)		(9.2)	二枚貝による条痕調整後ヨコ方向研磨	二枚貝による条痕調整後ヨコ方向研磨	A・B・C	良好	にぶい黄褐色	10YR5/3	褐色	10YR4/4	外面凹線あり 内面一部黒色化
第15図22	B-100 B-101	縄文	浅鉢	(17.2)	-	(5.0)	8.9	研磨・ナデ	研磨・ナデ	B・C・E	良好	黒褐色	5YR3/1	褐色	7.5YR4/4	屈曲部から口縁部にかけてのみ研磨を行う。
第15図23	B-83	縄文	浅鉢	(19.6)	-	3.0	7.4	二枚貝による条痕調整後ナデ・ナデ	凹線施文後にナデ・条痕調整後ナデ・その後研磨	C・F・I	良好	灰黄褐色～褐灰色	10YR5/2～10YR4/1	黒褐色～明赤褐色	5YR2/1～5YR5/1	外面炭素吸着による黒色化・口縁部に部分的に強火を受けた赤化が見られる
第15図24	B-サ	縄文	浅鉢	-	(10.6)	-	-	素地に化粧土を貼り研磨する	素地に化粧土を貼り研磨する	A・B・C・E	良好	にぶい褐色 明褐色 黒褐色	7.5YR5/4 7.5YR5/6 7.5YR3/1～3/2	橙色 明褐色 黒褐色 黒色	7.5YR6/8 7.5YR5/8 7.5YR3/1 7.5YR2/1	内面の黒色は炭素吸着時か
第15図25	B-8	縄文	浅鉢	-	-	8.7	(5.8)	二枚貝条痕調整後ナデ調整・ナデ	2枚外面による条痕調整・部分的に1次焼成時の黒斑及びススが付着・2条沈線文	C・B・D	良好	灰黄色～黄灰色	2.5YR6/2～2.5Y5/1	にぶい黄橙～黒褐色	10YR6/3～10YR3/1	縦位の沈線文2列施しその間をジグザグ状の短沈線文を施す
第15図26	B-48	縄文	浅鉢	-	-	-	(6.4)	二枚貝による条痕調整後研磨	研磨	A・C・E	良好	黒褐色	2.5Y3/2	黄灰色	2.5Y5/1	外面は丁寧な研磨
第15図27	B-南ﾍﾞﾙﾄ	縄文	小型浅鉢	10.0	-	-	2.7	ナデ調整	ナデ調整	A・B・C・D	良好					屈曲部に幅狭な枕線が2条
第15図28	B	縄文	椀	(16.8)	-	-	5.4	二枚貝条痕調整後ナデ及び口縁部付近研磨	３枚貝条痕調整後ナデ及び口縁部付近研磨	A・B・C	良好	オリーブ褐色	2.5Y4/4	にぶい黄橙色	10YR6/3	
第15図29	C-40 C-4	縄文	椀	-	-	9.2-11.3	4.3-5.3	丁寧なナデ	丁寧なナデ	A・B・C・E	良好	にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい橙色	7.5YR6/4	底辺は楕円状 口縁は４単位の山形状口縁になるか
第15図30	A-下層	縄文	高杯	-	-	-	(4.9)	ナデ	ナデ	B・C	良好	灰黄褐色	10YR5/3	褐灰色	10YR4/1	焼成前尖孔１ヶ所あり
第15図31	D-北ﾍﾞﾙﾄ	縄文	注口	-	-	-	3.4+α	ナデ	ナデ	A・B・E	良好	橙色	5YR6/6	にぶい橙色	5YR6/4	
第15図32	C-86	縄文	脚付鉢	(11.7)	-	-	(6.8)	ナデ	ナデ・丁寧なナデ	A・C・E・F	良好	にぶい黄橙色	10YR6/3	灰黄褐色 にぶい黄橙色	10YR6/2 10YR6/3	鉢は方形、口縁部にヘラ状工具による斜格子状沈線文

法量の単位は㎝。（）書きは、残存と復原を表す。
胎土：Ａ角閃石　Ｂ石英　Ｃ長石　Ｄ赤色粒子　Ｅ白色粒子　Ｆ黒色粒子　Ｇ雲母　Ｈ砂粒

第４表　出土遺物観察表（4）

挿図番号	出土位置	種別	器種	法量（㎝）			重さ（g）	石材	備考
				最大長	最大幅	最大厚			
第16図1	C	石器	打製石鏃	2.6	1.4	0.3	0.7	黒曜石	
第16図2	A	石器	石錐	4.4	1.4	0.3	2.3	サヌカイト	先端部、使用時に欠損。
第16図3	B	石器	大型剥片	6.2	2.2	0.8	11.8	黒曜石	
第16図4	C-95	石器	石匙	2.8	6.2	0.7	11.5	安山岩	自然面なし
第16図5	B-4	石器	縦型石匙	13.8	6.4	0.7	97.9	サヌカイト	抉り部は左右非対象
第16図6	C-64	石器	打製石斧	13.0	5.6	1.4	120.0	安山岩	側面は全体に刃部。
第16図7	C-4	石器	打製石斧	17.2	7.2	2.2	380.0	サヌカイト	刃部の摩滅痕は使用時のものか
第16図8	C	石器	打製石斧	7.6	6.0	1.2	51.9	サヌカイト	刃部の擦痕は風化の可能性有
第16図9	B-15	石器	磨製石斧	14.4	5.1	2.6	320.0	蛇紋岩	刃部に使用痕残る
第16図10	一括	石器	石核	6.2	5.4	4.0	130.0	黒曜石	裏面に微細剥離有。
第16図11	B-110	石器	磨石	13.4	11.8	3.5	940.0	安山岩	側面に敲打痕有
第16図12	A-100	石器	石皿	15.5	14.2	6.1	1980.0	凝灰岩	稜線が出るほど使いこまれている
第17図1	A-81	石製品	円盤状石製品	9.4	8.5	0.7	88.6	緑泥片岩	側面は前面加工
第17図2	C	石製品	穿孔円盤状石製品	7.6	7.9	2.0	87.0	凝灰岩	穿孔は両側穿孔
第17図3	A	土製品	円盤状土製品	5.5	5.4	0.7	63.3	-	表面は丁寧なナデ 胎土：角閃石・長石・白色粒子 色調：黒褐色、焼成：良好
第17図4	C-14	石器	十字形石器	6.7	6.8	0.8	40.0	緑泥片岩	片面のみ擦痕有
第17図5	C-1	石器	石棒	15.3	11.0	8.5	1560.0	安山岩	敲打痕がみられる



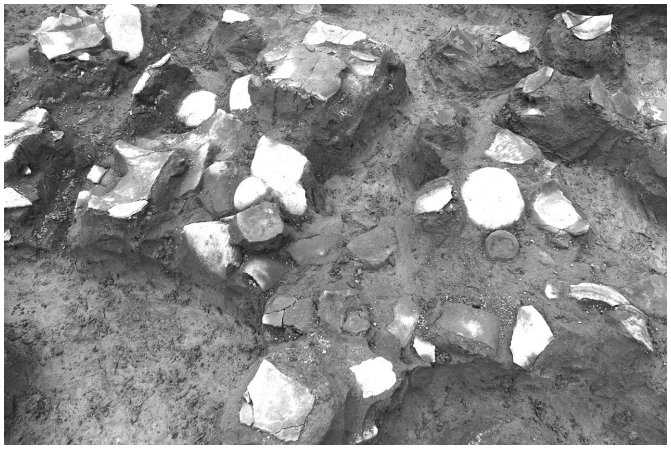
調査地周辺空中写真（西から）※白丸が調査地、北側は法恩寺山古墳群がある独立丘陵。

調査区垂直写真（上が東）

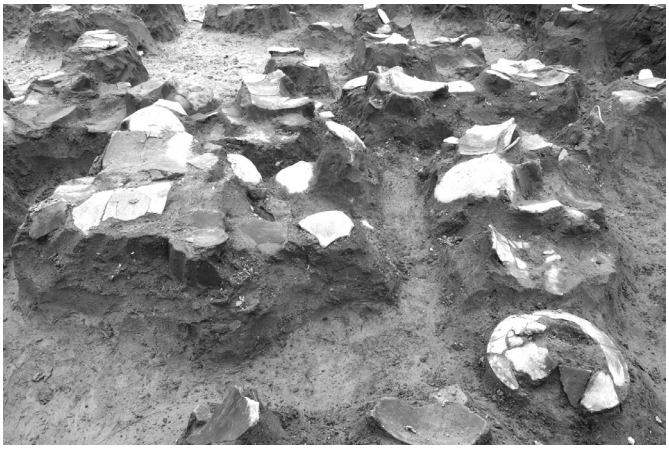
写真図版 2

① A 区遺物出土状況 1 （南西から）

② A 区遺物出土状況 2 （北西から）



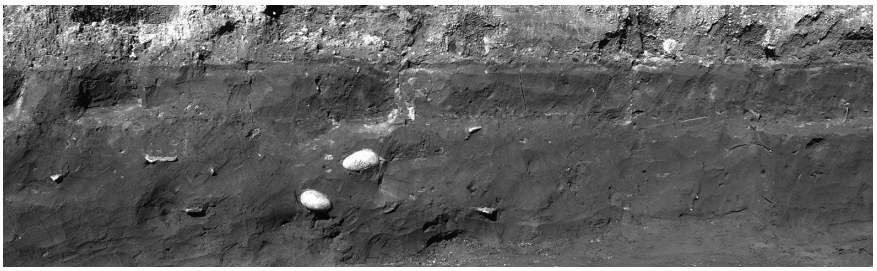
③ A 区遺物出土状況 3



④ A 区遺物出土状況 4

⑤ A 区遺物出土状況 5

⑥ A 区西壁土層堆積状況



⑦ A 区西壁土層堆積状況

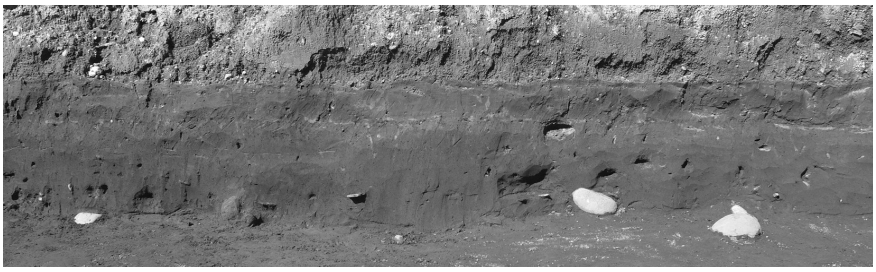
⑧ A 区北壁土層堆積状況

①Ｂ区遺物出土状況１（南西から）

②Ｂ区遺物出土状況２（南西から）

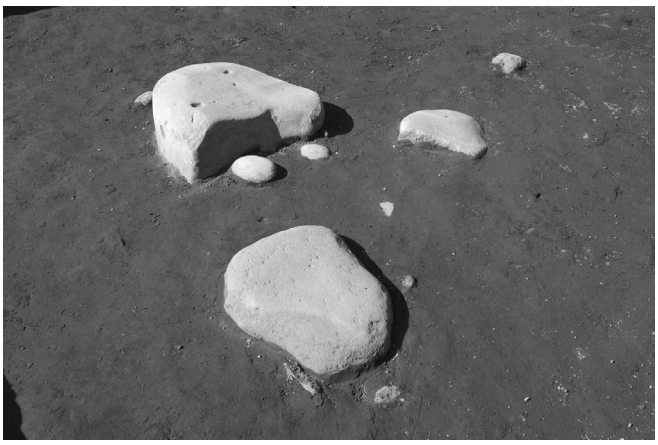
③Ｂ区遺物出土状況３

④Ｂ区遺物出土状況及び北壁土層堆積状況



⑤Ｂ区西壁土層堆積状況

⑥Ｃ区遺物出土状況１（北東から）

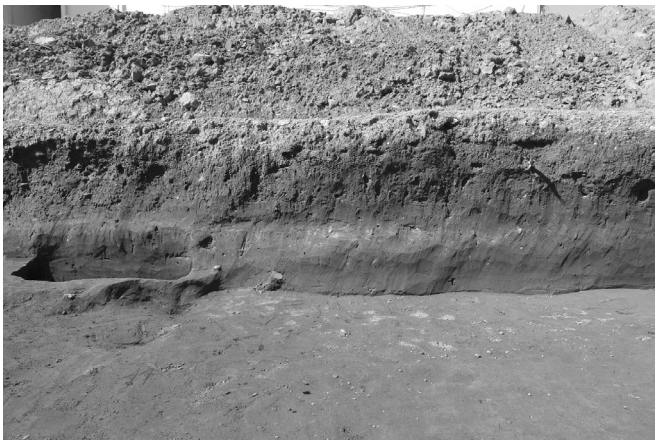


⑦Ｃ区遺物出土状況２

⑧Ｃ区北壁土層堆積状況

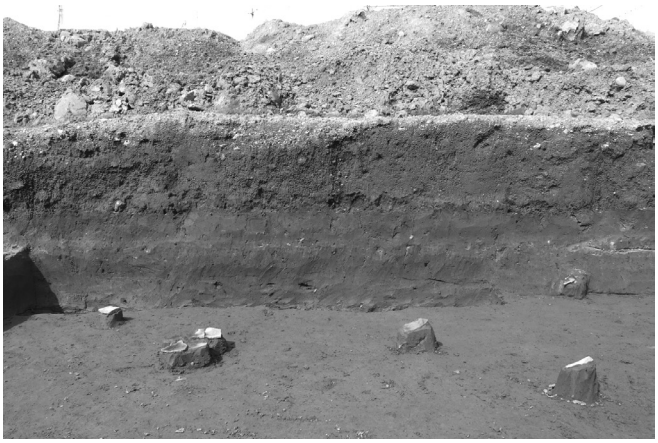
写真図版 4

①Ｃ区西壁土層堆積状況 1



②Ｃ区西壁土層堆積状況 2

③Ｄ区遺物出土状況（北東から）



④Ｄ区西壁土層堆積状況

⑤Ｄ区北壁（東側）土層堆積状況①

⑥Ｅ区遺物出土状況 1（南東から）

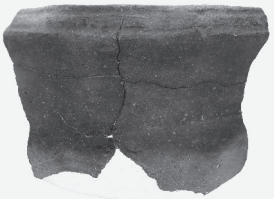
⑦Ｅ区遺物出土状況 2

⑧Ｆ区遺物出土状況及び西壁土層堆積状況

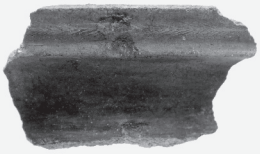
11-1

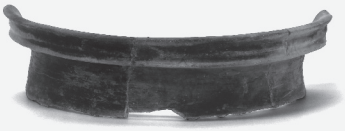
11-4

11-6


11-8

11-15

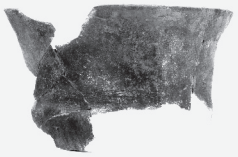

11-16

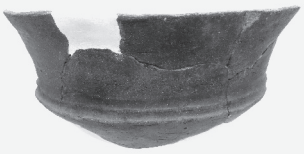

11-17

12-1

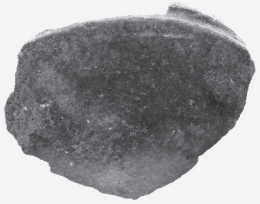
12-2

11-12


12-7


13-1

13-3

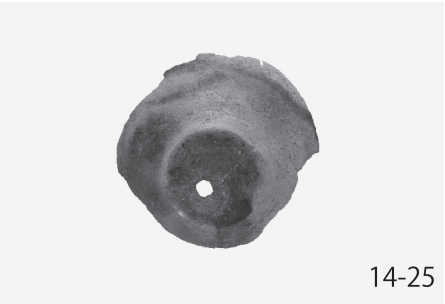

14-10

写真図版 6

14-20

14-23

14-24


14-25

15-2

15-5

15-6

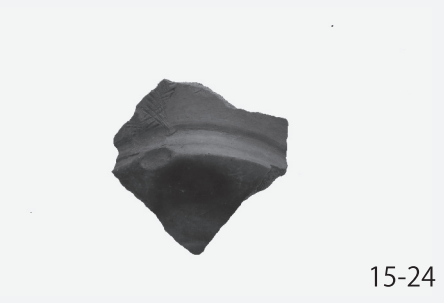
15-10

15-12

15-13

15-18

15-23


15-24

15-25

15-29

15-30

15-31

15-32

16-1

16-2

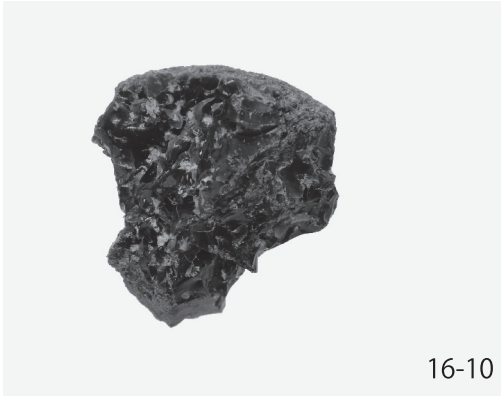
16-3

16-4

16-8

16-5

16-6


16-10

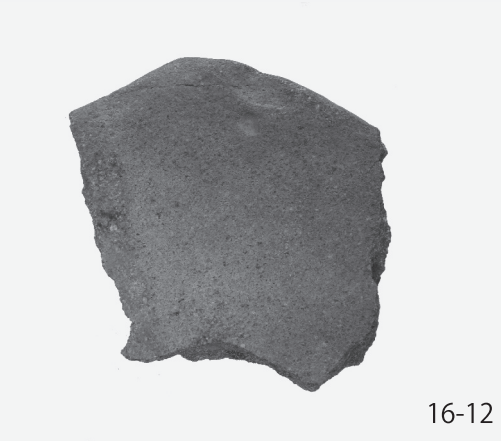
16-7

16-9

16-11

17-1

17-2


16-12

17-4

17-3

17-5

報 告 書 抄 録

ふりがな	かみいでいせき４じ
書名	上井手遺跡４次
副書名	
巻次	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 133 集
編著者名	若杉　竜太
編集機関	日田市教育庁文化財保護課
所在地	〒 877-8601　日田市田島 2-6-1
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒 877-8601　日田市田島 2-6-1
発行年月日	2018 年 3 月 22 日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かみいでいせき 上井手遺跡 ４次	おおいたけんひたし 大分県日田市 おおあざひだか 大字日高	44204-6	204162	33° 18′ 29″	130° 57′ 3″	20150901 ～ 20151020	272㎡	記録保存 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上井手遺跡 ４次	集落	縄文時代	溝状遺構	縄文土器 石器 石製品 土製品	加工場所や祭祀場所の存在が想定され、その周辺に廃棄されたと考えられる大量の縄文土器が出土

要　約	遺跡は日田盆地東部の三隈川右岸の沖積地に広がる。調査では縄文時代後期後半から末にかけての大量の縄文土器が出土した。これらの土器は大型の破片が多く、器面ほとんどが摩耗していないことから、周辺からの流れ込みによるものでなく、この場所に廃棄されたものと考えられる。また、台石や石皿などの大型石器、十字形石器や石棒などの祭祀系遺物が近い位置が出土していることから、加工作業場所や祭祀場所が存在していた可能性がある。こうしたことから、この場所を様々な行為に利用してきた人々の拠点的な集落が調査地近辺に存在することが想定され、この集落は過去の調査例と比較しても当時の日田盆地の中でも大きな集落の一つであったと考えられる。

上井手遺跡４次

日田市埋蔵文化財調査報告書第 133 集

2018 年 3 月 22 日

編集　日田市教育庁　文化財保護課

877-8601　大分県日田市田島 2-6-1

発行　日田市教育委員会

877-8601　大分県日田市田島 2-6-1

印刷　インデバイス

877-0076　大分県日田市亀川町 848-1